
気がついたらチート転生してたから取敢えず好き勝手やるお話（仮）

十六夜零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気がついたらチート転生してたから取敢えず好き勝手やるお話（仮）

【Nコード】

N6399V

【作者名】

十六夜零

【あらすじ】

気が付いたら転生してたから好き勝手やるおはなし。現在の章＜これは恐らくネギが来るまでの麻帆良での日常生活で章

ぷろろろ(前書き)

いきあたりばったりな小説ですがどうぞよろしくお願いします。

ぷろろろ

「れ．．あ．．よ．．ひ．．能．．け．．の．．す．．よ．．
．．．．みろ。」

「はい．．な．．す．．して．．い．．い．．い．．い．．せま．．
．う！」

「．．．．選ぶ．．い．．えの．．私．．よ．．な。」

「．．悪魔．．．．、王．．ての．．を。」

かすかに聞こえる声。

ノイズが走りほとんど聞き取ることができない。とても重要な気がするのだが．．。

「．．！？．．か．．！！．．ま．．こか．．は．．れ．．だ！！！」

「あ．．ああ．．．．あ．．．！！！！ち．．ど．．か．．で．．
．。」

視界が明るくなる。もうそろそろこの夢から覚めるだろう．．。

「あさだよ」

「おきて」 「おきて」

「おくれちゃうよ」

「おこられちゃうよ」

騒がしいです・・・。

「おはよう、皆。」

「おきたー」 「おきたね」

「おはよう」 「おはよー」

上半身を起こし周りに浮かんでいる精霊に挨拶をする。
時間を見るとまだ余裕がある。

（まあいつものことだし・・・。しかし久しぶりにこの夢を見ましたな）

自分が生まれる前の記憶。前世とは少し違う。

まあ前世の記憶もあるんだけどね。
知り合いが言うには魂の記憶らしい。おかげでこの嫌な立場でも楽しく生きて行けている。
嫌な立場は何か？簡単だ。

「あきー！学校にいこー！」

「だれ？」「ともだち？」「なまえなんだっけ？」

「やさい？」「やくみー」「やくみー」

精霊の言うとおり葉味・・・もといネギ。

俺の名前はアキ・スプリングフィールド。この状況に絶望以外何すればいいんだ・・・。

テンプレのごとく俺には通常の魔法を使えない。通常の魔法はね・・・。

通常の魔法ってのは魔力を餌にして精霊に仕事をやらせてもらっている。しかし俺はそれができない。いやしたくない。

今しゃべっている精霊は俺が魔法を使った結果、小さい精霊が喋れるほど自我を持ってしまった。階級が上がったっぽい。

簡単にいえば魔力の濃度が素で高すぎるのだ。もっと詳しいことは後で話してもらおう。

「いまいきますよ・・・」

軽く身支度を整え表へ出る。

俺はネギと一緒にメルディナ魔法学校に通ってるわけだが・・・
通常魔法の使えない俺は落ちこぼれたよ。その代わり筆記では常にトップに鎮座している。

「学校はあまり好きではないのだが・・・。」

「大丈夫！アキは僕が守るよ！」

これはネギの口癖だ。

悪魔襲撃事件以来ネギは俺を守ると大口を叩く。

ネギは攻撃魔法については天才だ。つまり力がある。それ故の言葉だろうが、胸糞悪い。

俺はもっと大きな力を持っている。ネギのようにわずかに周りより才能があるだけで慢心するような生温い根性もしていない。

俺の右手にある指輪。俺の魔力とは別の巨大な力。俺が魂から望んだ力。

過去の話しよう。

俺は昔から魔力が強大だった。村野誰一人として魔力では負けなかった。

前世の記憶のある俺は子供らしからぬ行動をする。

二つが合わさり俺は神童と呼ばれた。嬉しかったものだ。前世では高校を出てすぐフリーターになり、生活資金を稼ぎ、わずかだけ趣味に使うという生活。貯金なんてとてもではないし、親もとうに死んでいた。

それが今はどうだろう。育児放棄のクソ親いはいって周りは俺を拜めた。

悪魔襲撃の日。

原作のことなど忘れ呑気に生活していた俺は恐怖した。
幸いネギと共に出かけていたからはじめの大打撃は避けられた。

しかし村は燃えていった。

ネギは叫んだ。幼い俺になど目もくれず、燃え続ける村へと走った。

そこで！そう、そこで出会ったんだ！！！！

俺の運命を変える存在に！！

ネギに置いて行かれた俺はその場に立ち尽くしていた。
ネギのように死地に飛び込む勇氣はないし、逃げようにも足が動かない。

「おお！その力！あなたが我らが王か！！？？」

声が聞こえた。狂信を孕んだ声だ。

俺は困惑した。それはそうだ。いきなり、俺を殺すと思っていた悪魔に王かと問われたのだ。

「な、何をいつてる・・・。」

「あなた様のその指輪、我らが魔王の証！」

俺には物心ついた時から指輪が付いていた。

五芒星の描かれた指輪なのだが俺は親がくれたのかと・・・。

「俺が・・・魔王？」

「はっ！我らが魔界では王は世界に決められます。魔の王の素質がある者は魔王の指輪をもって生まれます。その指輪は全てを統べるにふさわしい、強大な魔力をもったものが選ばれるのです。」

「しかし・・・俺は人間だ。」

人間が魔王などと・・・。

「いえ、あなた様は完全な人間ではありません。魔の気配と神々しい気配が混ざっております。あなた様こそ、我らが王に相応しい！！！」

「そうか・・・魔王か・・・。フフフ・・・フフフ、面白い！それでは俺もお前らの王らしくしないと！」

「ハッ！我らはあなた様の僕。どのような命令でもなさってください。」

嬉しい。前世でも味わえなかった喜び！悪魔の王と言う存在に魂が喜んでいるのもわかる！

悪魔はいつの間にか数を増し、30程の悪魔が頭を垂れていた。

「では初めの命令だ。もうすぐここに討伐隊が来る！そいつは英雄とまで言われた強者！残念だがお前らでは敵わないだろう・・・。そこである程度行動したものは即刻魔界へ戻れ！俺もお前たちを失うのは悲しい！」

「「「ハッ！」「」「」」

どうやらここにいるのは位の高い悪魔だけのようなので直ぐに帰還する。

先程の話を聞いていなかった下級、それも底辺の悪魔だけが残る。かわいそうだがナギに倒されるだろう。あ、そういえば倒されても魔界に帰るだけだったっけ？まあいいや。

そのような感じで俺は力を手に入れた。
権力と配下。それが俺の数少ない友人であり仲間だ

???
side

物語は変わる。あるはずのない歯車を加えたために。

それは喜劇か悲劇か、はたまた残酷劇か。

気紛れに覗いた世界だが、それを見るのも楽しそうだ。

ああ、不変など存在せぬ。あの世界では得ることのできなかった未知を、どうか見せてくれたえ。

惜しい。実に惜しい。私が世界で過ごせたのなら、既知^{ゲットー}を超えられたかもしれない。

嘆いていても仕方がない。形を失った私をどうか楽しませてくれたまえ、

我が友の息子よ。

ぷろろろ(後書き)

ご意見、ご感想お待ちしております。

いっかいめ アリカ姫似ってことは要は男の娘じゃね？ (前書き)

独自解釈出ますが批判などは勘弁です・・・。

原作とズレてしまうようなものが有りましたら教えてもらえると幸いです。

いつかいいめ アリカ姫似てことは要は男の娘じゃね？

「ふう、学校なんて好き好んで行くものではありませんね。」

俺はメルディナから帰宅して嘆息する。

この学校は詰まらない。魔法学校と言いながら覚えるのは数個だけだし、先生は常に立派な魔法使いの良さを説く。

最早これは洗脳と言っても過言ではないのが現状だ。

口調？まあ一応学校とかでは敬語がデフォだよ。戦場や日常などその状況で使い分けてる。

「お茶でも飲むかな。」

不意に背後で気配を感じた。

俺はお茶の用意をしながら話しかける。

「どうかしたか、アス。」

「どうやらレヴィが王のクラスの人間に攻撃をしたようです。いかなさいますか？」

「またか…。別に止めなくて構わん。」

「T e s. 死傷者が出ない程度で宜しいですね？」

「ああ。それと、ベルゼに用がある。暇なときにも来るように言

つてくれ。」

「T e s . ベルゼなら常に暇でしょうから今すぐお呼びしましょう。」

「いや、そう急くな。茶でも飲んでいけ。」

用意していた紅茶を持ってリビングのテーブルに置く。そしてその横で跪いているアスを促す。

「・・・では、失礼します。」

少し悩んでからアスは席に着く。

「しかしアス、お前が何もしないのは意外だったよ。」

「虐めの件ですか。我慢しているのです。王が許されるのなら今すぐ相手を八つ裂きにしたいところです。しかし王はそのようなことは望まれないでしょう?」

「分かってくれて嬉しいよ、アス。今この時点で俺の力やお前たちのことがバレるのは困るのだよ。ましてや俺の容姿は・・・。」

俺の容姿はアリカ。それを幼くしたような感じだ。この容姿と悪魔。二つ合わされば恰好の餌だろう。

「王はとても美しいのですから、身体に傷があればすぐおっしやつてください。私がこの体で直して差し上げましょう。」

「んなこと言っても相手はしねえよ。最近は疲れてるんだ。」

「それは残念です。」

全然残念そうではないが……。

アスは呟くと飲み終えたカップを皿に戻し立ち上がる。

「それではアキ様。私は少々野暮用が有るゆえ、失礼させていただきます。」

野暮用ねえ……。大方レヴィを折檻しに行くんだろう。レヴィもMっ気あるみたいだし止めないけど・

背後の気配が消える。

さて彼女たちを紹介しよう。

彼女はアスモデウス。強大な悪魔だ。彼女は他の悪魔より忠を重ねる。俺に尽くしてくれるのだが少々過保護なので少し困る。でもさすが色欲の悪魔。よく夜這いされる。10才の少年になにを求めてんだか……。しっかり相手するけどね。

会話で名前の上がったレヴィはレヴィアタン。

残念ながら魔法の才能のない俺。しかし学校は英雄の息子というだけで、他より優遇されている。それを良く思わないのはクラスメイト。

悪戯や苛めを受ける訳だが……。

俺は気にしないのだがレヴィは確り仕返しをする。さすが嫉妬の悪魔。

朝起きたら家の天井にいたり、『偶然』強く吹いた風に押されて川に落ちたりと。

自業自得なので止めはしないが死なない程度に監視させてる。

返事がT e s . なのは単純に俺の趣味。お願いしただけ。

あとは追って説明しよう。

今、俺がベルゼを呼んだのは理由があります。

さっきちよろつと言ったが俺の今の年齢は10才。つまり今年で卒業なわけだ。

なんだかんだ理由を付けられて俺もネギと一緒に飛級したからな。

そこで、ベルゼには情報を探って欲しいのです！

「アキ様。ベルゼブブ、到着しました。」

現れたのは凛々しい姿をした長身の女性。

「ん、早かったな。早速で悪いがお願いがあるんだ。俺の通っているメルディナ魔法学校で俺たち兄弟は特別扱いされている。理由はわかるな？」

「T e s . アキ様の父上が魔法世界における英雄、ナギ・スプリングフィールドだからであります。」

「うむ。俺たちメルディナの生徒は卒業試験と言うのをもらう。中はランダムらしい。立派な魔法使いになりたければクリアしろって感じでな。だが、俺はどうもあの試験はランダムとは思えない。」

治癒魔法が得意な人には魔法世界の病院につかせたり、占いが得意なものには旧世界で占い師をやらせたり。どう考えてもひとりひとりにあわせている。ここからはわかるか？」

「T e s. つまり私が学園に入り込み卒業試験の決め方、またそれに関する情報を集めてくればよろしいのですね？」

うん、相変わらず良く出来た家臣だ。七つの大罪の悪魔は力が強いから頼りにしている。

「その通りだ。ベルゼのような配下を持つ悪魔に間諜をやらせるのは忍びないのだがな。下位悪魔に任せてもすぐにバレるだろうし。それに比べベルゼは悪魔と相手に悟られないようにできる上蠅になることができる。申し訳ないが任せられないだろうか？」

メルディナ学園長も確かぬらりひよんの仲間だったはずだ。普通の悪魔じゃ直ぐにバレるだろう。

「T e s. お気になさらないでください。このベルゼブブ。必ずやアキ様のお力になりましょう。」

「ああ、頼りにしてるぞ。終わったら飯でも御馳走してやる。」

「・・・それでは失礼します。」

少し飯に惹かれたな。暴食と言われるだけあってご飯は好きだもんな。

さて、いくらベルゼで探りを入れて証拠を出しても課題自体はかわりはしないだろう。そこで俺が決めることは一つ。どのような条件

を交渉に出すか、だ。

実際課題といっても実行するかしないかは俺の判断になるわけだ。そしてあいつら、特にメルディナの校長は俺とネギをなんとしてでも立派な魔法使いにしようとするだろう。理由はいくつかあるが交渉の時点で使えるのは、メルディナ、校長の風評のため。

もし俺が卒業試験を無視して日常生活へ行けば、メルディナとその校長には、『英雄の息子をダメにした』というレッテルが貼られる。そんなことにでもなれば校長は大変だろう。つまりそれを理由にして数回だけこちらからあちらへ要求ができるというわけだ。数回、と言っても一回使えばその対策をされても不思議じゃないのでこの一回が重要なんだ。

資金。これはあって困るものではないが態々メルディナに頼むことではないだろう。

施設、または物資。これも資金と同様だ。自作の符でも売って稼げば施設や物資は手に入る。

・・・となるとメルディナでしか手に入れることのできない希少品。禁術書の類。権利などでもいいかもしれない。身分の保証される上それなりの権利はもらえるだろう。いやしかし・・・。

・・・！そうだ、そういえばメルディナにはアレがあるじゃないか！

ふふふ、卒業の日が楽しみだ。

「ああゝ暇だな・・・。」

俺は学校をサボり部屋でごろごろしていた。

「そんなに暇ならあゝ、学校行けばあ？」

その横で一緒にごろごろしているのは『怠惰』のベルフェゴール。
間延びした喋り方と常に眠そうな顔をしてるのが特徴だ。

言つとくが人間状態はみんな美人だ。ベルはどっちかというと可愛
いって感じだな。天然だし。

「ってかなんで俺の部屋にいるんだよ。」

「いいじゃない、減るもんじゃないし。」

「お前の食ってる菓子はどんどん減ってくよ・・・。」

ごろゝつとしながらもポテチがどんどんベルの腹に入ってく。いや
まあそこまで食べないしいいけどさあ。一応一ヶ月分買い置いたの
が半日で食いつくされるのはひどい。

俺はベルから袋を取り上げる。

「ああゝ。なにするんだあゝ。」

「喰いすぎだ。他にも喰う奴居るんだから一人で消化するんじゃない

い。」

「ううゝ。じゃあねるゝ。」

食物がもう帰ってこないとわかるとすぐ眠りにつく。

ベルはかなりスタイルいいんだけどどうやって維持してるんだろ。

暇だなあ……。

「そうだ！武器を作ろう！」

思い立ったが吉日、早速工房へ行こう。

俺は一般的な西洋魔術の魔方陣を壁に書き『移動・工房』の意味を持たせた魔力を込める。

説明してなかったが普通の魔法の使えない俺は、魔力にそのまま意味を持たせて神秘を起こす。例えば『火』と言う意味を持たせたら魔力は火を起こす。今回のように壁などに魔方陣を書くとその範囲が『移動・工房』の意味、つまり工房へのゲートに変化するわけだ。

魔方陣を抜けると白い部屋に出る。そこには机と調理場所、少し奥には鍛冶場もある。

部屋には様々なアンティークが飾られていて高級感が出ている。

作る武器はね、決めてるんだよ。俺、西尾維新大好きだったんだよねえゝ。

「これはこれは、アキ様。ようこそいらっしやいました。」

出迎えたのはマルバス。ソロモン72柱の序列第5番の地獄の大総裁と呼ばれる36の悪魔の軍団を率いると言われている悪魔だ。工芸に関する知識が豊富で本人も工芸が好きなため工房の管理人として置いている。

この部屋に置いてある家具などは全て彼女の手作りだ。え？また女なのかって？いやもともとライオンの姿だし、人間になる際女の人でっていったらこうなった。頼りになるおねえさんって感じた。

「今日は、マルバス。暇だし武器でも作りに来たよ。」

「暇で武器を作るのはどうかと思うんですけどね。」

マルバスは苦笑。

俺はとりあえず鍛冶場に入る。

「じゃあ少し作ってるから管理よろしく。」

「はい。頑張ってくださいね。」

とりあえず俺が作ろうと思うのは『絶刀・鉋』と『斬刀・鈍』かな。『頑丈さ』と『切れ味』を主眼にしてるからつくりやすそう。

「そうと決まればまずは鉋からだな。確か五尺だったよな。一尺1／3mだから……。だいたい150cm位かな。」

少年制作中

「できた！」

見た目は無骨で刀身が150cm位。鏢はない。

「これに『不変』の魔力を込めたいんだが……。魔力尽きたら効果消えるよな……。」

うん……。

「マルバスく少しいいか？」

「はい、なんでしょうか？」

奥から直ぐにマルバスが現れる。やっぱり本職に聞くのが一番だ。

「これに『不変』を付加したいんだが、その効果を長続きさせれないか？」

「そうですね……。そこの柄に魔力吸収の刻印でも刻んだらどうです？」

「そ・れ・だ！」

決まれば早速行動だ！

俺は材料、道具スペース（鋸や石ころからオリハルコンやヒビイロ

カネまであるよ！）から魔術刻印用のペンを持ってくる。

このペンは先が魔石で出来ている。その魔石に与えたい『意味』を持たせた魔力を込めながら魔方陣を書くとその効果を与えられるのだ！あ、魔方陣は其処らの本にのってるのを使ってるよ。使い分けたりは滅多にしない。そーゆーのよくわかんないし。

で、書き終えたら、今度は刀身にそのまま『不変』の効果を与えて完成！

「よっしゃ！武器第一弾『絶刀・鉋』完成！助かったよマルバス。」

「いえいえ、お役に立てたのなら幸いです。」

微笑みながらマルバスは去っていく。

「んじゃあ次は鈍かな。」

~~~~~

なう ろーでいんぐ

~~~~~

「よし、出来た。鞘もこれでいいかな。」

刀身以外真っ黒だな。主眼の切れ味については簡単だ。

刀身に『超振動』と力を込めれば完成！これで刀身に触れたものは原子崩壊を起こし見た目はまるでスパッと斬れたようになるのだ！こっちは常に効果発動したら困るから特に仕掛けとかはいらない。

しまう場所だが俺は身体に作っている。だから俺の体は少々特殊だ。服を脱ぐと素肌には所狭しと魔方阵が描かれてる。

大雑把に効果を説明すると、前側の心臓部分と背中全体に『防御』。腕には『硬化』。防御と似てるがこれは腕自体を固くする。足の裏には『跳躍』。足には『加速』。これでスピードはかなり出る。あとは掌に『収納』と、真庭のアノ人を真似するため喉にも『収納』がある。(滅茶苦茶痛かった・・・)首には『冷風』と『保温』があり、これで一年中Gパンにパーカーっていうラフな格好ができる。掌の収納は小さめだから大きいのは喉から出してる。便利だ・・・。とりあえず完成した変形刀を仕舞い、別の武器をつくる。

「正直もう眠い。だから簡単なのにしよう！」

つゝわけで野球バットの形の型を作り、鉛(純度100%)を流し込む。んで固まったらそこに鉄製(打ち込むために先端はオリハルコン)の釘でめった打ちにして完成!『愚神礼賛^{シームレスバイアス}』!

「ふはああ!疲れた・・・もう寝るかな。」

ネタ武器は趣味になりそうだな。

また後で説明するけど俺の作った会社で金が入るからなあ・・・。
では皆様。俺はもう寝るとしますよ。

「ちよっ!アキ様!ここ工房・・・!」

なんか聞こえるけど気のせいだろ

Z Z Z ……………

??? side

いや、愉快。実に愉快な少年だ。

理解できぬ力には恐怖を抱くのが普通の人間なのだが、真逆遊びに使うとは！

己の正体を知ったとき、彼は絶望ではなく歓喜しようだよ。

これは私が手を下すまでもなく、愉快な劇になりそうだよ、魔の王よ。

いっかいめ アリカ姫似ってことは要は男の娘じゃね？ (後書き)

悪魔とか武器とかは Wiki を見えます

主人公の体の刻印の詳細はまた別の機会に・・・。

にかいめ なんか色々吹っ切れたから好き勝手やろうと今更思った（前書き）

投稿です。

毎日更新とかではなくて掛け次第0..00に予約投稿してるだけです。

あしからず

にかいめ　なんか色々吹っ切れたから好き勝手やろうと今更思った

おはようございます。アキ・スプリングフィールドです。

今は卒業式の真っ最中。学校恒例の校長先生のお話を聞き流しています。

以前ベルゼに調べてもらってた、卒業課題についての結果がでました。

それは意外に普通で、各先生方が生徒にあった課題の候補をいくつかだし、それをランダムで出すそうです。ランダムって言えばランダムだけどね。

しかし例外も存在しました。それが俺たち兄弟。俺とネギの課題だけは日本で教師、しかいれてないそうです。悪質です。まあこれで相手方の弱みも握れたのでメルディナにあるダイオラ魔法球を頂こうと思います。

まほねつとでの価格は時価。それも稀にしか売っていません。運良く俺が購入できたのは2500万ほどしました。代金は我が社「MASカンパニー」から出させてもらった。

「M《魔王による》A《悪魔の為の》S《素晴らしい》カンパニー《会社》」は悠久の風がウザイので設立してみたNGOギルド。名前の通り、人間に化けた悪魔が初期メンバーで首領は俺、九条レム。初期メンバー以外顔も知らない幻の社長だ。5才の時に設立したのだが、今じゃ悠久の風と同格のギルドだ。内容は戦争孤児を預り、養子に出すまで面倒みたり、寄付されたお金で孤児院を作っている。穏和な悪魔は自ら志願して入社している。

はじめは悪魔のみなさんに出資してもらったが2年で倍にして返しましたよ。最近は回復の魔法薬の販売も始めて年収10億超えだ。

その金で日本にも事務所を作り、多額の寄付などで有名になっている。

「ネギ・スプリングフィールド!!」

「はい!」

おや。思考している間に終盤だな。
まあ俺は呼ばれることはないからのんびりしてても構わないんだけどね。

「アキ・スプリングフィールド!」

「……マジかよ。はい。」

俺は校長の前まで足を進める。

「よく頑張ったの。」

「よく言いますね。無理やり飛級させといて。」

「……」

「まあいいですよ。後でお話がありますので時間を開けておいってください。それでは」

周囲からは緊張したように礼するように見せながら校長に話しかける。

そしてしずかに席に着く。さて、交渉の時間かな。

「アキ、卒業試験なんだったの？」

「ああ、ネカネ姉さん。日本で教師をやることだそうです。」

「アキ！？あんたまで日本なの！？ううう・・・私だけ仲間はずれじゃない！」

うわあ！どこから湧いて出たんだよアーニャ！

「んなこと言われてもね・・・あんたまでってことはネギも日本なんですよね？」

「そうなのよ・・・アキは兎も角ネギはちよつと・・・世間知らずすぎるから心配で・・・。」

常識知らずの間違いだろうよ。

「でも校長先生がその学校の校長とは知り合いだから安心してくれ、だそうよ。」

いや、俺の一番の不安要素なんだけど・・・。

「では私は少し用あるので、失礼しますね。」

「ええ、頑張ってね。」

すたこらさっさと校長室へGO！

校長室なう

「それで話とはなんじゃ？アキ君。」

「いや、あなたもだいたい想像が付いているのでしょ？ほかの教員が居ないですし。」

「まあもう。お主は聡いので気づくとは思ってたのジャガ、真逆こんなに早いとわのう」

「まあずいぶん前から気づいてましたがね。ほら、母親のこととか。」

「む！そちらも気づいてたとは・・・。」

「いや普通気づきますよ。父親についてはこんなに情報があるのに母親については全くありませんからね。ネギは馬鹿すぎますから。」

「ネギ君は・・・。うん、純真なだけなんじゃ、きつと・・・。」

「だいいいですね・・・。それでなんですけど、ダイオラマ魔法球くれませんか？麻帆良行ってあげますから。」

「しょうがないのう……。ホレ。ほかは何かないかの？ できる限りのことはしてあげるつもりじゃ。いやなにMMの厄介事に巻き込んでしまった謝罪のようなものじゃ。」

ポイツと魔法球を投げられる。

え？ ちよつとまでKOOLに、COOLになるんだ！ え、なに真逆俺の思考とか全部無駄？ え、なにこれせっかく頑張ってくれたベルゼさんになんていえばいいんだ？ いやいやいやいや、ありえないだろ、しかもMMとか黒幕言っちゃってますよこのジジイ！ なんですか！ マジですか！ こんなのですがのアキさんでも予想できませんでしたよ！

「えーと……。じゃあ予定より早く教育実習生として麻帆良いかせてほしいなあ……。とかは？」

「その程度お安い御用じゃ。紹介状と連絡をしといてやろう。」

ナンですか！ めっちゃええ人やんこのジジイ！ もうあれですよ？ 周りにせず自由気ままに生きていいんですかねえ！？

「ひとりべやでも用意させてやるかのう……。」

いやあんた最高だよジジイ！ いや校長先生！ あのぬらりひよんの仲間とか言ってすいませんでしたあ！

「いやあ、真逆ここまでしてくれるとは思いませんでしたよ。」

「なに、気にするでない。」

「いろいろ準備してたんですけどさすが学園長ですね」

「そうかの。」

「MASカンパニーを設立した甲斐がありましたー」

「そうか・・・いまなんと？」

「さすが学園長ですね」

「そのあとじゃ！」

「MASカンパニー設立した甲斐がありました」

「そこじゃああ！え、危機間違いじゃないよね？わし、そこまで年とってないぞ！なんじゃ、最近急成長したあの会社はお主が建てたと？！おk、COOLになるんじゃないや儂！ふゝ落ち着いたわい」

HAHAHA、学園長もお年ですね。あとすこしキモイです。

「ええ、ニュースとかで悠久の風がうざかったんで話題占領のためにつくっちゃった☆」

「☆とか付けるでない……。はあ……。やはりナギの息子じやのう……。」

「それほどでもない」

「ほめとらんわい！」

「まあまあいいじゃないですか。これで私も安心して麻帆良に行けます。最後に一言でもどうぞ！」

「はぁ……。向こうの学園長には気をつけるのじゃぞ。」

「はいありがとうございますー！では本日7時の便で行ってきますー！」

待ってろよ麻帆良！俺の発明も向こうでなら受け入れられる気がするぜ！

学園長 side

ふう、真逆あそこまで元気とはのう。おそらく自分を殺して生活してきたのじゃろう。昔いきなりあんなこと聞いてきたので分かっているとは思ったが、さすがナギの息子じゃ。馬鹿さと才能は十分すぎるほど持つてるようじゃのう。

くくく昔くくく

「学園長、私の母親は誰なのですか？」

「ふお！？な、なんじゃいきなり。」

「あ、いいです、今の反応でだいたいわかりましたから。……
やはり情報の規制もかかってるか……」

「え、なに？儂これだけのために呼び出されたの？」

~~~~~現在~~~~~

あの時点で気づいていたと言うことじゃとすれば、ナギなんぞめでないほど化けるの。魔法は使えんらしいが、それも本当かどうかわからんの。

おっと迎えを頼まないかんの  
近右衛門でも彼は扱いきれんじやろう。ふおふおふお、そう考えると少しは気が晴れるわい

しかし……。

「ダイオラマ魔法球は……高すぎじゃ……」

アキside

じゃばんなう

かなり早かったですよ。誰かが独白してる間に着いたみたいです。  
え？メタ発言はやめろ？いやいや、なんの事やら。

取敢えずじゃぱんのまほらに付いたら、高畑さんが迎えに来てくれました。こう、カッコイイというよりダンディですね。おじさまです。

敬語なのはきつと久しぶりに日本を見て動揺してるんです。ええ、科学力が何百年か進んでもここは日本ですもんね。泣いてなんかいないですよ。心の冷や汗です。

現在地は学園長室。近衛近右衛門さんのかわいそうな頭を見ています。

「うむ、よくきたの。なに、話は向こうから聞いておるわ。教育実習生じゃったの。またどうしてじゃ？」

「いやいや、当然じゃないですか。教育実習生でなくても私のような未熟者が担当するのです、それなりに把握しとかなければいけないでしょう？なんせ教師をするということは生徒の人生を預かるようなものです。それをいきなりやれと言われても私にはとてもとても・・・。ああ、容姿については気にしないで結構ですよ。当日は年齢詐称薬をのませて頂きますから、18才でも十分通ります。」

一気にまくし立てすぎたか？まあいいか。

「うむ。覚悟と心構えは十分そうじゃな。部屋についてじゃがのう、少し離れた所にある一軒家を使ってもらおう。隣にお主の担当するクラスの生徒も住んでおるので、仲良くしてくれ。」

マクダウエルのことかー！！

まあいいや、家についたら即同盟結びに行こう。うん、それがいい。

安全第一。

「了解しました。それでなんですが、部屋にトラップなど仕掛けても良いでしょうか？ほら、私の情報網だところには侵入者が来るらしいじゃないですか。」

ふっふ。好き放題買仕掛けたい！

「安全を考えたら当然じゃの。しかし危険すぎるものはやめるのじやぞ。」

「……………善処します。」

「……泥棒の焼死体など勘弁じゃぞ？」

「大丈夫です。死体なんて残りませんから。実証済みです。バレなければ犯罪じゃない。これはどこの国でも共通ですから。」

「やめて！そんな怖いこと家顔でいわないで！儂ないちゃう！」

「……それはいやですね、絵面的に。善処します。」

「それ治す気ない人のセリフじゃろ！？しかもさりげなく酷い！」

「それでは失礼します。」

家というのも気になるしね。トラップ仕掛けるにも家の形が大事ですから。

## 高畑 side

いや、やはり彼はすごいな。10才とは思えない思考をしている。前に彼が住んでるという家に行ってみただけ、入った瞬間天井から銃撃されたし、奥に進むと通路に閉じ込められてレーザーで体が切断されるところだった。壁を破壊して逃げなければ死んでいたよ・・。

しかもその時は留守だったからね・・・。無駄足と言うかなんというか・・・。

それでも子供らしいところはあって、剣が好きみたいだ。ネカネさんの話だと部屋には剣が何十刀も飾られているみたいだ。すこし見てみたいと思ったけど僕も死にたくはないからね。レプリカだと信じてるよ。

でも彼はネカネさん以外の前ではかなり静からしい。日本にきて心境がかわったのかな？ 迎えに行ったときも、いろいろ話していた。話と違ってだいぶ明るい子になっている。少し行き過ぎなきもしないでもないけど明るいのはいいことだからね。多めに見てあげなきゃ。

## アキ side

家は洋館だった。いや、めっちゃ綺麗だった。家具はなかったけど、

工房にあったソファやらテーブルを置いたらだいぶ様になったよ。家も確保できたしマクダウェル家に同盟でも結びに行こうと思ったんだけど見つかってしまった……。

「王よ！何故言ってくださらないのですか！我々がどれだけ心配したと思ってるんですか！」

工房行ったときにマルバスが焦ってたと思ったらしい事だったらしい。ベルゼとアスに説教喰らってる。

「アス様、貴方は借りにも王なのです。そのように思いつきで行動されては困ります。もうすこし王としての自覚を持ってください。誰か一人に言伝頼む程度、時間は掛からないでしょう？」

激昂するアスに優しく説くベルゼ。優しく話しても言ってる内容が的を射すぎて心苦しいです……。

「すまない……。今度からは必ず誰かに言うから……。もういいじゃん……。」

現在の時刻、午後7時。昼の3時からもう4時間だぞ……。

「いいえ！まだまだです！王には今まで言えなかったこともありますから、今まとめて言っておきましょう！王は無鉄砲すぎるのです！それで何度、森の獣や悪魔に襲われたのですか！？くどくどくど」

「アキ様、貴方は王である上に政治的な立場でもとても危険なのです。今まで何度刺客を送り込まれましたか？一度や二度ではないはずです。それもあなたの知らないところでベルやレヴィ、アス。当然私も敵を消してきたのです。そのことをよく考えて行動してもら



わないと私たち・・・くどくどくど」

もう、無理だよ・・・。

**にかいめ　なんか色々吹っ切れたから好き勝手やろうと今更思った（後書き）**

シリアスとか無理です。

交渉とか私の頭が持ちません。

周りも「アキだしね・・・。」ってなるていどに頑張ります。

ご意見、ご感想お待ちしております。

**さんかいめ    ロリシヨタがよかったけど結果そうはいかなかった（前書き）**

もうこれがデフォです。

初めの真面目な感じなんて忘れてもらったほうがいいかもしれません。

それでは、どうぞ

**さんかいめ　ロリシヨタがよかったけど結果そうはいかなかった**

どうもおはようございます、アキ・スプリングフィールドです。

昨日は一日中説教を喰らいました。具体的には夜中の2時まで。

確かに俺も悪かった気がするけど、やりすぎかなって感じがしないでもないです。言いませんが。

という訳で現在時刻は朝の9時。土曜日です。朝食の時間に悪いとは思うんですけどマクダウェル家に伺おうと思っています。ええ、早いに越したことはありません。私もでなければ安心して寛げませんから。

「もしもし、マクダウェルさんの御宅でしょうか？」

「はい、そうですがどちら様でしょうか？」

「私は、アキ・スプリングフィールドと言うものなのですが本日そちらにお邪魔して構いませんか？ 闇の福音（笑）さんにお話があるので。」

「………はい、構わないそうです。あとマスターより伝言です。『覚えておけ』だそうです。」

「では『記憶容量を無駄遣いしたくありません』とお伝えしてください。それでは。」

うん、アポを取るのには大切ですね。たとえそれが目的地の目の前であっても。

———ピン・・・・・・・・・・ぽーん

押しっぱなしにするとこうなるんだよね。ついやっちゃうよ。  
少し待つと茶々丸さんが出迎えてくれた。

「おはようございます。朝早くに申し訳ございません。先ほど連絡した、アキ・スプリングフィールドと言うものです。」

「マスターがお待ちです。・・・後ろの方々は？」

礼儀正しいのは好きだよ。でもリアクションが欲しいです。

「彼女は俺の従者ですので、気にしないでください。」

あ、ベルゼのことね。

「そうですか。奥へどうぞ。マスターがお待ちしております。」

「失礼します。」

奥に入るといた。闇の福音かつこわらいかつことじ。

「お前がナギの息子か。どうした、この悪の魔法使いに正義の魔法使いが何のようだ」

・・・。短い文だけど突っ込みたいことあるんだよ。アンナノと一緒にされたよ！育児放棄の糞オヤジとかと！

「えーと、返事の前にせいぎのまほうつかいとやらに私をカテゴラ

イズしないでください。反吐が出ます。ああ、悪の魔法使いも勘弁です。そんな自分から悪なんて恥ずかしくてとてもとても……。」

「馬鹿にしてるよな？ そうだよな？ ！ふん、変わり者とは聞いていたがここまでとはな。で、なんの用なんだ？」

「なに、簡単な話です。同盟を組みにきました。」

「馬鹿にしといてよくいえたな……はあ、理由を言え」

そりゃ、簡単には受け入れてくれないよね。

「私の安全確保です。隣に越してきたんですよ？ 私。ただでさえ、英雄の息子と言う看板のせいで狙われてるんです。隣からも狙われたらたまったもんじゃありません。それに貴方はほかのものと違い経験という厄介なものがありますし、私の糞親父に呪いをかけられているという点で、敵対されやすいですから。負ける気はありませんが面倒じゃないですか。」

『不死殺し』の魔力でも送り込めばかてるけど、触れなきゃ意味がない。武器にも込めれるけど、当たらなきゃ意味がないんですよ。

「ほう？ この『闇の福音』に対してお前のような小僧が負ける気はないと？ 舐めているのか？」

「確かに貴方は強いですけど、第一に封印されてますし。仮に封印がなかったとしても不死を殺す程度、片手間でできます。まああなたに触れればですが……。ベルゼ。」

一声かけるとベルゼは神速とも思える速度で、己の武器の槍をエヴ

アンジェリンの首に突き付ける。

「くっ！・・・同盟ではなかったのか？」

「いえいえ、殺す気などありませんよ。ただ此方の戦力を示したただけです。私の従者は私より数段強いですがね。部下も私の戦力ですから。ベルゼ、もういいよ。」

「T e s .」

さて、これで向こうが切れてしまえば交渉は失敗ですね。

「・・・その従者、なにものだ？人間ではないだろう。」

「ああ、わかりますか？さすがエヴァンジェリンさん。その通り、彼女は悪魔なんですよ。名前はベルゼブブ。聞いたことくらいあるでしょう？」

「んな！？あの七つの大罪の『暴食』かつ！？」

「ええ、そのとおりです。他にもいるのですが、まあいずれ紹介しますよ。ああ、同盟についてですが、こちらにも報酬・・・とかやつてあげれることがありますよ。その呪いの解除とか・・・。」

「そんなことができるのか！？これはあのジジイが解析してもわからなかったんだぞ！？」

一発だね。1分も掛からないよ。呪いは鎖のようなもの。それが絡まって解けないなら切ればいいんです。

「まあ魔力でのゴリ押しになりますけどね。簡単ですよ。」

「やれ！今すぐやれ！出来るのなら同盟でもなんでも受けてやる！」

「おやおや、そんなこと言って、後悔してもしらないよ？」

「失礼。」

俺は手を口に突っ込む。

む、どれだっけ？うゝん、これはベレッタでしょ、これは絶刀鉋、これは・・・お、あったあった。

肘よりも深く入った腕を啞然として見ているエヴァンジェリン。それを無視して（てかしゃべれない。）ある剣を出す。

「うん、これこれ。」

「ちょっとまって！それどこから出した！？」

「え？体？」

「いや入るわけないだろ！？それどう見てもお前の身長よりでかいぞ！どうやってそんなもん身体にしまってるんだ！？」

「喉のもっとおくらへん？」

「だああああ！んな訳あるかあ！お前の喉を通るわけないだろそんなもん！そのくらい分かれ！それともわかってやってるのか！？」

「分かっててやてます。」



「否定しろよせめてえ！なんで認めるんだよ！それにお前の従者もなんで平気で見てるんだよ！！」

「何時もの事ですので。」

「それがおかしいんだろお！！？？・・・はあ・・・はあ・・・」

息を切らして、叫ぶエヴァンジェリン。後ろで茶々丸も止めるべきかとオロオロしている。  
何をそんな取り乱してるんだよエヴァちゃん♪まあわかっててやってるんだけどね。彼女のツッコミスキルは最高だよ。痛いの我慢した甲斐があるってもんよ。

「もういい・・・さっさとやってくれ・・・」

何をそんな諦めたような目をしてるんだ？

「てかもう敬語やめていい？疲れた。いいよね？ok。じゃあちゃっちゃんとやりますよ。」

『解除』の魔力を少し弱めに刀につき込む。この刀は『霊刀・名無』。込める魔力にあわせて形状、効果が変わるスグレモノ。少し弱めに入れるのは強すぎると真祖の術式まで解除しちゃうからだ。

「では失礼して・・・」

「おいまてやめろ、何を振りかぶってるんだ！え、ちよつ、きゃあああああ！！！」

————ギャリイン!!!!!!!!!!

振りかぶってたの？刀ですよwwもう振り下ろしたけどね。

説明しよう！この『霊刀・名無』の刀身は魔力を込めると何にも当たらない。そして込めた魔力だけで切りつけることができるのだ！！

「・・・ん？の、呪がとけてる！？よくやった、アキ・スプリング  
フィールド！！！！これで私は自由だ！！ハーハッハッハッハッご  
ほっごほっ！」

「ああ、マスターがあんなに喜んで・・・。撮影しなくては・・・。」

うん。喜んでくれて何よりだ。

「喜んでいるところ悪いんだけど少しいいか？エヴァンジェリン。」

「特別にエヴァと呼ぶことを許してやろう！それでなんだ？」

「いや、なに。呪いのかわりに要求したいものがあってね。」

これは今まで俺が夢見たこと！

俺の真剣さを感じ取って、エヴァちゃんの顔が真剣になる。

「なんだ、この恩もあるし気に入った。出来ることなら叶えてやろう。」

「俺の要求は・・・。」

「要求は？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「撫でさせろばかやろー！」

ぎゅーっと抱きしめたかったんだよ！なんだよこの可愛い生物！エターナルロリータ！みてて和むんだよこのやろー！！！！

「わっなでるなあー！！」

「可愛いなあチクショー！撫でさせろ！舐めさせろお！なあそのメイド！エヴァちゃん頂戴よ！大切にするからさあ！」

「な、お前何を言って・・・・／＼ひゃああ、そ、そんなとこなめるなあ・・・・／＼」

「茶々丸と申します。マスターでしたらどうぞ。マスターも嬉しそうですね、見てみたいですから。」

「おいイイ！このポケロボ！主人をそんな勝手に売るな！それに見てみたいって何をだ！」

「当然、アキ様とマスターの性k「やめろ！それ以上言うな！巻いてやrってそんなとこ触るなあ！」」

「よいではないかよいではないかあ♪」

「・・・・記憶中・・・・記憶中・・・・」

「茶々丸殿、あとでダビングしてもらえないだろうか？」

「お安い御用です。」

「お前らしい加減にしろ おおおおおおおお！！！！！！！！！！」

「いやゝ申し訳ない。ずっと思ってたもんだからさ。気にしないでくれると嬉しいのです。あ、俺のことは意識してくれると嬉しいですよ。」

「なっ／＼／＼何をいうかこのバカ者！！！！」

「真っ赤なマスター……はあ……はあ……」

「アキ様とエヴァさん……。お似合いですね。悪くないです。」

金髪ロリと金髪シヨタの組み合わせだお☆

「まあとにかくこれで同盟は成されたし、エヴァちゃんは愛でれたし、やり残すことはないね。それじゃあ、私たちは帰りますよ。」

「さっさと帰れ！」

むう……。これではまるで俺が嫌われてるみたいではないか。

「告白なら24時間受け付けてます♪」

「誰がするか！」

待ってろよエヴァちゃん！いつか俺が愛玩動物のように可愛がってやるからね！

しかし、登校地獄と学園結界を解いちゃったから、集会か何か開かれそうだなあ……。まあ集まるようだったら俺も参加して手を打ってやらないとね。好感度上昇のためにも！

「じゃあねー」

「それでは失礼しました。」

俺はマクダウエル家を後にしてすぐ隣りの家に入る。

「ベルゼゝ、飲み物ゝ。」

「了解しました。」

ああゝ明日から教師かゝ。

学園長には年齢詐称薬使うって言ったけどそんなことしないよ？後で二重にダイオラマ魔法球使って、大体8年くらい暮らしてくるだけ。のんびり修行ができるよゝ。まあ本編では書かないよ。もし外伝とか出たら書かれるかもね。え？読者様にいつてるんだよ。

「アキ様、随分と彼女を気に入ったようですね。」

「うん。一目惚れって奴かな。」

「……今なんと？」

「惚れちゃった、エヴァちゃんに。」

こう、無性に尽くしたくなるのも惚れたからかな？もともと学園結界は解く気なかったんだけどなあ。

「そうですか。ついにアキ様にもそのような女性が……。では今後はアスと寝ないようになしてくださいね？」

「……………少し目移りしちゃうくらいいいんじゃない？」

「貴方はあれですか、ハーレムでも作る気ですか？ただでさえ配下に愛されているというのに。」

「あれれ？ってことはベルゼも？まあそれとこれとは別ってことで。」

英雄色を好むというじゃありませんか。英雄になれば万事解決です。順番が違うのは気のせいです。

「まあアキ様が決めたのなら何もいいませんがね。それで今後の予定は？」

「取敢えず、2重で魔法球使って8年くらい生活します。うーん、メンバ―はベルゼとアスでいいよ。態々、会社休ませるのも悪いですし。」

ってことで机に魔法球を置いてなかにはいる。

「うわー一面浜辺……。まあ市販のだし、狭いのは我慢かな。で、メルディナで貰ったのに入ります。」

「T e s .」

うわいつのまに現れた。まあアスは呼ばればすぐ来るから当たり前か。本人曰く第六感的なものでわかるらしい。すごいよね。その忠実心はありがたいよ。ちなみに一番この物語のはじめに出た悪魔さんの名前はメルファルです。覚えておかなくていいですよ、おっさんですしもう出ませんから。

新たな魔法球の仲はかなり立派だ。やまもある！海もある！川もある！擬似だろうけど完璧すぎるぞ！

「さてさて、私たち三人はkの無人島モドキで八年間くらします。」

食べ物なんかは常時補給される仕様になってるので問題ないよ。ええ、（家族）愛を育みましょう！」

「お、王よ、そんな大胆な・・・！」

「アス、きつと貴方は勘違いしてるわよ。アキさまは確信犯でしようけど。」

「どれでは皆さん。八年後に会いましょう！」

「王は誰に言ってるのだ？」

「画面の向こう側のみなさんだよ。」

「はぁ・・・。」

~~~~~八年後~~~~~

という訳で帰ってまいりました我が家！私の体は青年！自分で言うのもなんだけど美男子です！

これからはこの姿で普段生活することになるので周りの方々に行っておかねばなりませんね。ええ、明日学校が終わったら即エヴァちゃんに愛に行きましょう！（誤字にあらす）そして！告白するのです！

エヴァちゃんから見ればあつて一日で告白されたみたいだけど、俺からして見れば八年間、会うこともできず想い続けていたんですから問題ないです。ええ、ノープログラムだ。アスとベルゼとの関係？・・・ノーコメントで。

それでは学校に行きましようかね。

さんかいめ ロリシヨタがよかったけど結果そうはいかなかった（後書き）

次回、教育実習生アキ。『初恋は叶わないという言葉嘘にしている！』です。おたのしみに。（嘘）

よんかいめ 若○ボイスいいよね。でも詳しくはよく知らないんだ。(前書き)

投稿です。

このgdgdがデフォです。

よんかいめ 若○ボイスいいよね。でも詳しくはよく知らないんだ。

「付き合ってください!」

「断る!」

はい、たった今振られましたアキ・スプリングフィールドです……。
ははははは……。初恋は実らないってホントだったんだね……。
まあいきなりでもあれなんで回想どうぞ。

~~~~~数分前。~~~~~

「お邪魔します」

俺は一人でエヴァちゃん家へ来ていた。見た目は18才の好青年!

「はい……。どちら様でしょうか?」

案の定出てきた茶々丸は困惑していた。まあ見た目が全然違うから  
しょうがないと思うんだけど。

「オレだよ、オレ。」

「声紋照合開始……。アキ様でしょうか?」

「そうそう、分かってくれて嬉しいよ。エヴァちゃんいる?」

「はい。ですがマスターなら現在お休みになられております」

現在時刻午前5時。学校で呼び出される前に来たものだから、早くなってしまうのはしょうがないとしか言いようがないんだが・・・。

「うん、俺が起しに行っている?」

「・・・よろしいですが、間違いは起こさないようにお願いします。主にナニをと言っておきます」

「大ジョブ大ジョブ。両者同意じゃないとそんなことしないから。主にナニをと言っておく。」

「どうぞ。」

俺は茶々丸の通されてエヴァの自室まで来た。ちゃちゃ丸はそこで失礼します、と実に空気を読んで退室してくれた。

残るのは立ち尽くす俺と、今だすやすやと幼い寝顔を晒しているエヴァちゃんだけだ。うわ、緊張する! めっちゃ緊張する! 取敢えず、ゆさゆさと肩を揺らして起こしてみる。

「ん、あと五年・・・」

「いや寝過ぎだから!」

べちん! と俺の必殺ハリセンが火を吹いた!・・・ってし、しまったあああああああ!

「む! 誰だ貴様は!」

「何言ってんだよ、昨日あったばかりじゃないか。エヴァちゃん。」

「その喋り方は・・・アキか！？何故この部屋に！！！！？はっ！  
さては襲いに！？そして何故そんなでかい！」

俺の今の容姿は、大体170センチくらいで髪は切っていないから腰  
まで掛かり、スーツ姿（このまま学校行くため）だ。後半物凄い身  
長伸びたんだ。すごく嬉しい。

「それも実に面白そうだけど、俺は茶々丸に通されてお前を起に来  
ただけ。身長は、もう8年経ってるから。」

嘘じゃないよ？俺はしっかり八年経験したよ？

「な、なんだとお！？まさか呪いが解けたのに喜びすぎて酒を浴び  
るように飲んだから！？」

そんなことしてたのかよ……。ってか信じるんだ、信じちゃうん  
だ。寝ぼけてるエヴァちゃん可愛い」

「まあそれは嘘だけどな。後で説明するよ。ご飯たべよ？」

「あ、ああ・・・。」

釈然としないながらも、エヴァは着替えて一緒にリビングまで行く。

「もぐもぐ・・・それでなんの用なんだ？」

「ああ、大事な話があるんだ・・・。」

真剣に。今までのふざけた心を落ち着け目を見つめる。心無しかエヴァの頬が赤いのは気のせいだろう。

「な、なんだ？」

「エヴァ、付き合ってください！」

「こ、断る！」

ここで冒頭に戻ると言うわけさ。

エヴァ side

ななななな、ナニヲ言ってるんだこいつは！！！！それこそ昨日あったばかりじゃないか！かかか、からかっているのか？！でもあいつの目は本気出し・・・・／／／つい断るとか言ってしまったじゃないか！

いや、別にいやじゃないんだ、うん。よく見ると顔の作りは綺麗だし、メモ大きくて綺麗だし、背も高いし、お揃いの金髪だし・・・・っついていや、べつにその・・・・ああ・ああ・・・・あれ？なんか混乱してきた・・・・。

ああ！ちょっと待て！泣いて帰るな！って早い！もう視界から消えたぞあいつ！

まままま全く、わわ、私の調子を狂わせおって！

アキ side

「はぁ・・・。」

「どうしたんだい？アキ君。そんな溜息ばかりついて。」

「いや、気にしないでください。少し緊張してるです。」

「そうかい？気分が悪いなら僕に言ってくればいいからね。」

ため息が出るのかもしれないというものだよ。さすがに朝一で振られたら気分は優れなくkなる。

そんな俺をよそに高畑先生は読んだら入ってきてね。と声をかけて、あからさまな罫を解除しながら教室に入る。

「はぁ・・・。」

「アキ君、入ってきていいよ！」



### 三人称

2・Aは今か今かと新人の教育実習生が入ってくるのを待っていた。それもその期待は尋常ではない。なぜなら高畑は、『かっこいいし、明るくて優しいよ』などと評価が上がるようなことばかり行っていたからだ。しかし入ってきたのは・・・。

「しつれいしま〜わっ」ビタァァン！

やる気のない返事と共に入ってきたアキは何もないところで足を引っ掛けて気持ちのいい音を出して地面に倒れた。

『うわ、いたそ〜・・・。』

しかし、アキは痛がるそぶりもみせず立ち上がり、のろのろと声を上げる。

「えーと・・・アキ・スプリングフィールドです。・・・・・・よろしく」

哀愁漂うその姿に、クラスの一人、朝倉和美は聞かずにはいれなかった。

「先生、なんでそんなに元気ないんですか？」

ゴクリと息を飲む2・A。それはそうだ。入ってきたのは長身でと

とても凛々しい顔立ちをしている青年。プライベートがきになるのも無理はない。

「それは・・・今日朝一で、初恋の人にふられたからです。はははは・・・」

『うわぁ・・・。』

覇気のない笑い声に、さすがに可哀想になる2-Aだった・・・。

朝倉side

私の情報網にも捕まらなかった教育実習生がきた。うん、それはよかった。

しかし、こんなイケメンを振る人が居るのは信じられないよね。ルックスも完璧で、教師志望。これ以上の優良物件があったてことなのか？正直アキ先生以上のイケメン、私は見たことないよ・・・。悪いとは思うけど、この私、朝倉和美のパパタッチ魂が情報をつかめと言っている！これはきくしかないよ！

「ちなみに先生を振った人の名前を教えてください！正直、信じられないよ。」

「そやなく。顔も完璧やし、先生もかなり褒めつつたで？どこがいかなかったんやろか？」

木乃香もやっぱりそう思うよね。  
でもやっぱそんなこと教えてくれないかな？

「教室見渡してみなよ」

先生は短くそう言う。

言われた通り見渡すと、端の席、エヴァちゃんが居て堪れないような、恥ずかしいような表情で必死にアキ先生から目を逸らしていた。

って、え？マジ？まさかエヴァちゃん！？先生ロリコン！？

「うん、まあ一目惚れって奴でさあ。あって二日目で告ったんだけどダメだったわあ……。」

行動早っ！？しかもその年で初恋が二日前の一目惚れ！？このひとかなり純情なんじゃない？っていうかそうとしか思えないんだけど……。

私だったら、うけるけどなあ。この見た目で少年の心！萌えるじゃないの！

エヴァちゃんにクラス中からの嫉妬と避難の視線が送られてるよ……。

あ、もう涙目になってる。

「そんな目で見るとはかやろー！！」

ありやりや。どっか行っちゃった。まあ私でも耐えれないよ。

## アキside

「どうだった？ 一日体験してみて。」

「やっぱり疲れますね。私、体力には自信あったんですけど、これは精神的に。」

なんていうんだろ、プレッシャーって言うか、生徒からの視線が重く感じる。実習だけでも生徒たちの未来を任されてるって言っても過言ではない訳だからね。

朝は色々励まされたおかげで元気が出たよ。もっと自分を磨いて好感度を稼ごうと思う。

あと高畑先生は意外と授業がうまかった。出張が多くなければ新田先生とは違う意味でいい先生だね。

「ははは、まあ大人でも疲れる位だからね。それと学園長が今夜。世界樹広場で集会があるから来てくれ、だそうだ。ほかの魔法先生とかとの顔合わせにもなるから、忘れないでくれよ。」

「了解しました。それでは今夜……。」

「うん、お疲れ様。」

集会は或だろうと思ってたけど、まさか呼ばれるとはね。まあこれはこれで楽しめそうだからいいけど。今度はなにしようかなあ……。そうだね、テイルズの術でも使ってみようか。詠唱はwikiと

かで見たのしか知らないけどいいよね！

そうと決まれば変装しなきゃ！

———夜・世界樹広場———

「アキ君はまだ来ないのかな？」

「彼はあれで、真面目ですからもうそろそろくるかと。まだ2分ありますので。」

ふふふ、それでは！

「満ちよ天光、開け黄泉の門。」

「な、なんじゃ！？」

「この名を持ちて、いでよ！インディグネーション！！！！！！」

学園長とその周り、半径5Mの魔方陣が出てくる。そしてその場に大量の雷が降り注ぐ！

さすが学園長。確かに加減してあったが最強呪文を防ぎきった！これは期待！という訳で

「万象を為しえる根源たる力…太古に刻まれしその記憶…我が呼び

声に応え、今ここに蘇れ！エンシエント・カタストロフィ！！」

————ズガガガアッ！！！！

1HITしかしてない筈だけと思いつきり吹っ飛ばされた。ああ・  
・秘奥義はさすがに無理かWWW

「が、学園長！！」

「問題ない。あのジジイは防いだはずだあ……。死ぬことはない  
だろう。」

響きわたる若本ボイス！

「だ、誰だ貴様は！？」

「誰だ……。貴様何を言っているう。その子小僧に呼ばれてえ、  
我は今、ここにいる。」

「生憎、君のような人を読んだ覚えはないよ。何者だ？」

かけえ！高畑先生超ダンディ！あんな老け顔にはなりたくないけ  
ど男として魅力があるな。

「あ、こんなんじゃないよね・」

そこで俺は今！声を戻して、背中のチャックを開けて外に飛び出る！  
その唾然とした顔が俺の楽しみさ！いやあ、制作時間約2時間のこ  
のバルバトススーツで真逆バレないとは思わなかった。

「あ、アキ君っ！？そ、それは！？そしてさっきの魔法は！？」

「これは私の開発した、人工皮膚を利用したパワードスーツ。『バルバトスーツ』です。それとさっきの魔法は、マナを使用した呪文ですね。」

「・・・・・・」

そんな大口開いて驚くなよ、恥ずかしい！

「ゴホっ！アキ君は魔法を使えないと聞いていたんじゃないのう。」

お、復活した。ってか土で汚れてるだけで服とか破れてすらいねえ  
wwwそれなんてチートwww  
心配して近寄る先生を抑えてこちらに向き直る。これは質問の答えを待ってるのかな？

「誰が行ったんですか？それは。私は一度も魔法が使えないなんて言った覚えはありませんよ？また魔法学校では魔法を一回も使いませんでしたけどね。そちらの勘違いということじゃありませんか？嫌ですねえ、私がそんな簡単に自分の手札を見せるわけじゃないじゃないですか。あ、今見せちゃいましたね、いやいや、うっかりしてました。ところで学園長、今回の集会はほかの魔法先生との顔合わせでしたよね？では自己紹介をさせてもらいましょう。」

私の名前はアキ・スプリングフィールド。どこにでもいる子供ですよ好きなものは面白いこと、嫌いなモノはつまらないものです。よろしく願います！」

キツカリ90度のお辞儀をしてみせる。

やべえ、俺いまチョー決まってね？自分で言うけどこの体無駄にイケメンだし。ガングロフィーニさんが物凄い睨みつけてきて怖いのは黙ってたほうがいいのかな？

「まあ特に目的はないんじゃない？」

「ありゃ？よくお分かりで。それでも行動は悟られないようにしてるんですが」

「なに、メルディナの学園長が、暴走癖があって娯楽のためなら苦労は惜しまない子、といっておったでの。まさかこんなに早く問題を起こすとは思わなんだが。」

メルディナ校長、さすがよくわかっていらっしやる。でもほかの先生に言うのは頂けんあ。楽しみが減るではないか。

「エヴァの封印もそんなところじゃろ？」

「あ、それは違いますよ。あれはしっかり理由がありました。」

「ほ？それは？」

「至極簡単なことです。彼女に惚れてしまいましたので。」

「ふおおおお、それはそれは。そのような理由なら構わんじやろ。エヴァも何もする気はないようじゃしの。実に少年らしい考えじゃわい。」

気前いいな、学園長。まあ色々言われてもともとエヴァちゃんの契約期間は切れてるから、色々言われる筋合いないんだけどね。少



しつまんないけど、エヴァちゃんもそれなりに人望があるようだな。怒りを露わにしているのは3、4人くらいではかは特に何も思っていないみたいだ。

「それではもうそろそろ帰ってよろしいでしょうか？」

「まあそう急ぐでない。どうじゃ、少し力試しせんか？」

ああ、なるほど。実力確認ね。いいよ、やってやろうじゃないか。

「構いませんよ。相手はどちらでしょうか？」

「僕にやらせてくれないか？少しきになるんでね。」

「構わないですよ。高畑先生ならある程度力を出していけそうです。」

「では両者、中央に立ちたまえ。」

「右手に魔力、左手に気・・・感卦法」

うえ、マジですかい！？様子見なし！？

俺はいそいで鉋を取り出す。ほぼ全員が啞然としてたけど知ったことっちゃねえ。

「おk、いつでも大丈夫ですよ。」

「それでは・・・始めい！！！！」

始まると同時にタカミチ（もうこれでいいや）は居合拳を飛ばして

くる。しかし俺はそれを、絶刀鉋で弾き飛ばす。頑丈さを主眼に置いた刀、その程度じゃ壊れやしない。

「随分丈夫な刀だね。出し方にも驚いたけど武器まで規格外とは。」

「しゃべってる暇などあるのですか？報復絶刀！！！」

俺は呑気に話かけてくるタカミチに報復絶刀を繰り出す。ただ、振り下ろすと言う単純な技だが、それゆえに出だしも早く、頑丈さを上手く利用し、防ぎきることのできない重い一撃の技となる。

それをタカミチは感卦法により、異常に上がった身体能力で交わす。正直目が追いつかない。

「ハッ！」

後ろに回り込まれていたらしくタカミチは居合拳を繰り出す。しかし

「残念。単純に火力不足です。」

「なっ！？直撃のはずだ！」

「ええ、確かにあたりましたね。でも、先程も言いました。私の方が硬かっただけです。」

皮膚に刻み込まれた魔方陣がその衝撃を全て殺す。ダメージは蚊に刺された程度だ。

あれだ、いまさらだけど、チートすぎるわこのボディ。

「そうかい、じゃあこれはどうかな？」

「いいじゃん、迎え撃って上げますよ。」

「ハアアア!」

「豪殺居合拳!!!!」 「報復絶刀!!!!」

——ガアアアアン!!!!!!

「いやあ、惜しかったですね。」

「グフっ!・・・ナギさん以上のバグキャラ・・・」

なんてこと言い残して倒れるんだよ!!もったかつこよく終わらせろよ!

「ふおおおおお、タカミチ君を倒すとはのう、して、一ついいかの?」

「あ?なんででしょうか?」

「その『報復絶刀』とやらはどういう仕組みなのじゃ?」

「思いつき振り下ろすだけ。」

「・・・ほ?ほ、他にはないのかの?魔力を込めるとか、気を込めるとか。」

「うゝん・・・。気合、ですかね・・・。」

「え、なにこのバグキャラ怖い。」

他にあるとすれば・・・

——作者（西尾維新）への愛だよ！

よんかいめ 若○ボイスいいよね。でも詳しくはよくしらないんだ。(後書き)

周りの先生が空気な件。

某お嬢様ストーカーは驚きで気絶したらしいお！

魔法の呪文などはwiki参照。

間違ってたらかえてくれると嬉しいです。

**ごかいめ キャラ作りは壊すためにあるのだよ! (前書き)**

投稿です。

誤字脱字報告、感想は常時受け付けております。

**ごかいめ キャラ作りは壊すためにあるのだよ！**

「せんせー！」

「神楽坂さん、発言を許可します。」

「どうして高畑先生は休みなの？」

「徹夜でモ〇ハンやってたらダウンしてしまったからです。」

「せんせー！」

「朝倉さん、発言を許可します。」

「なんで徹夜でモ〇ハンやってたの？」

「何度やっても火竜の天鱗が出なかったからです。」

『そっか、じゃあ仕方ないね。』

俺はは2nd G派だぜ！3rdも面白いけど敵が弱すぎる気がする。ちなみに「この時代にそれまだ発売してないよね？！」みたいな無粋なことは言わないでね。ご都合主義ってやつです。麻帆良の科学力はア世界一イ！！とおもって納得しちゃってください。しかしこの説明で納得できる2-Aばねえ。

実際は昨日の戦闘での怪我が今だ完治できずにいるだけなんだけどね。やりすぎっちゃって骨が数本逝っちゃった、テヘツ☆

そんなわけで今回は二日目いきなり臨時担任となりました。

まあ担任はH Rとかやってあとは担当教科だけやればいいからそこまで面倒はない。あるとすれば・・・

この子達が何か起こしたら俺の責任問題になるってことかな・・・。あれ、そう考えるとめっちゃ不安なんだけど。この子達は何も起こさない自信がないんだけど(汗)

ほら、タカミチが休みで落ち込んでいる神楽坂さんをいいんちよがからかってそこから何故かくぎみーと明石さんが口論して宮崎さんがおろおろして綾瀬さんがそれをなだめて、近衛さんが誤解されるような紛らわしいことといって朝倉さんが教室の外に飛び出してったじゃないか。

あれ？どうしてこうなった・・・。

取敢えずS H Rが終わったので俺は職員室に戻る。

「アキ君、2－Aの担任はきついと思うけどどうだ？」

新田先生があらわれた！

情報 いいひと

体罰上等

もっと評価されるべき

「これは新田先生。おはようございます。」

丁寧におじぎして挨拶をすると、新田先生は満足そうに、おはよう、



と返してくれた。

色々学校から不人気な新田先生だが、一般的な常識をもって接すればかなりいい人です。麻帆良だからこそ、上手くいかないんですね。常識なんてありませんから。

実はこの人も認識阻害結界効いてないんじゃない？と思われるも仕方ないくらい常識人だ。うん。

「なんというか、気が付いたらペース握られてますよね、怖いぐらいのチームワークです。」

「ハハハッ！あのクラスの元気は学校一と行っていいくらいですからね。アキ君も、あのクラスを担当するなら、早くなれないと大変なことになりますよ。」

「ははは・・・。そうですね。元気なのはいいことですが、ここは学校。しっかり言ってあげなくてはいいけませんね。」

「その意気で頑張ってください。あなたには期待してますよ。」

「はい！ありがとうございます！」

とまあなかなかいい先生でしょ？

ちなみに言ってなかったが俺の担当は社会だ。何故社会になったのかはしらんが、教科書見ればある程度説明できる教科だから有難い。気を使ってくれたのだろうか？いや、あのジジイに限ってそれはないな。

※実際はタカミチが提案しました。

そんなわけで2－Aの授業風景をどうぞ

「えーと、この織田信長は魔王と言われ様々な敵将を討ち取っていききました。とくにスキルが反則的で、正面から戦う気は起きません。遠距離攻撃などをじわじわ与えて倒しましょう。」

「なんの授業だ！」

「歴史？」

「なんか違うよ！なんで私たちが戦うことを前提に話してるの！？しかもスキルってなに！？」

「こう、魔法とか、魔神剣みたいな」

「先生！また作品が変わってます！それはティーズです！さっきまではどう考えても戦○シリーズでした！」

「信長ってジェノサイドブレイヴァーとかつかえるん？」

「頑張ればいけると思います、信長ですのぞ」

「使えないよ！なんで作品クロスさせるの！？しかも使われたらなすすべなく消滅だよ！じわじわする前に消えるよ！てか信長強すぎだよ！勝てっこないよ！」

「おい、アキ。私はどっちかというと魔術のほうが好きだぞ。投影とかな。」

「それはさすがにキツイでしょう。でも信長を討伐したとされる明智光秀なら出来るかもしれないね。特殊スキルで。あと先生を付けないさ。」

「できないよ！明智さんそんな人外じゃないはずだよ！なんかその世界観おかしくなってない！？」

「ハハハ。半分冗談です。」

「「半分は本気なのかあああああああ！！！」」

ツツコミは早乙女さんと朝倉さん。

ボケは近衛さんとエヴァちゃんです。

進行は私です。

とまあこれが今日の歴史の授業。

俺が狂わせてるように見えるが安心しろ。しっかり今日のノルマをクリアしてから遊んでいる。授業の進行度に問題が出ることはない・  
・はずだ。

戦○のネタ出してるけど俺は一回もやったこと無いぞ？適当言っただけだ。テイ○ズ系だってそこまでやり込んでない。近衛さんが知ってたことが驚きだがね。しかもバルバ○ス。

ほかのクラスの授業？普通すぎてつまらんから言わねえよ。俺の中学時代を思い出す嫌な光景だった。

そんなわけで放課後。学校帰り道。

「あ、せんせ〜。」

帰ろうとしていると後ろから呼び止められる。

「近衛さんに神楽坂さんじゃないですか。どうかしましたか？」

「見かけたから声かけただけよ。」

「うち、いまから夕食の買い物しにいく予定なんや。明日菜も一緒にな。それと、木乃香って読んでくれてっもええよ。」

ああ、そういえばルームメイトだったけ？ まあ木乃香さんと呼ばせてもらおう。

「そうですか。では 木乃香さんと呼ばせていただきます。私も今から買い物に行くところなんですよ。」

「そうなん？なら一緒にいこ〜。」

「ちょっと木乃香！」

「ええやん、こんなかつこいい人と歩けるんやで？」

「褒めても何も出ませんよ？あ、木乃香さんアップルパイ食べる？」

「しっかり出してんじゃないのよ！」

「これ美味しいよ！明日菜も食べてみ！」

うん、このコンビは面白いな。

「それなら作った甲斐があります。」

「うーん・・・」

「どうしたん？明日菜。」

俺が木乃香さんに話しかけていると神楽坂さんは唸って何か考え事を始めたようだ。ない頭使って何考えてるのはかなり気になるが、男の俺が聞くのも野暮ってもんでしょ。

「なあーんか違和感あるのよねー。その敬語。無理に作ってない？私たちの前なら普通に話してもいいわよ？別に誰も言わないし。」

「ハハハッ！そうか？じゃあ喜んで普通に話させてもらおう！いい加減敬語も疲れたんだよねー、家でもできる限り（配下いるから）敬語で話してるし、学校では教師として自覚もった行動を。とかなんとかいわれて。自然とこんな感じになっちゃうんだよ。いやー、楽に話していいって言うなら助かるよ。敬語なんて俺には似合わない！ってか正直自分で言ってる気持ち悪いし。でもメント向かって言われるとは思ってもなかったよハハハ！」

いやー敬語なんて好きでする奴居ないだろ。それがくせになっちゃってるならしゃあないけど、俺はもとから結構言葉使い乱暴だし。でも一番大きいのは配下かな。王として相応しい態度を取るのも疲れるんだよ。

「せんせい、ほんととはよく喋るんやね。気づかんかったわ。明日菜、良く気づいたなあ。」

「なんていうか、敬語使われるたびにイラッってくるのよね。それで作ってる感じがしたから行ってみたんだけど・・・真逆こままで変わるとは思わなかったわ・・・。」

「まあ気にすんな。いろいろあるんだよ。あ！そうだ、今夜うちで飯食わないか？うちの飯はかなり旨い自信があるんだ。」

ベルゼが作ったやつだよ？俺はんな器用なことできないし。

「ほんま？じゃあ行かせてもらおうわあ。明日菜はどうする？」

「木乃香一人で活かせるのは危ない気がするからついてくわよ。」

「明日菜、素直になりいな。クスクス」

「ツンデレなんだな、明日菜は。まあわかってたけど。」

「ツンデレ言うな！それに分かってたってなによ！？」

うーん、何となくとしか言えないけど、数回会話すれば誰でも気づくと思うぞ？

「オーラみたいなのがあるんだよ。木乃香もわかるだろ？」

「何となくやけどわかるえ。怒りっぽいけど明日菜は優しいからなあ。」

明日菜は顔を赤くして、まったく、と嘆息した。

正直照れ隠しにしなみえんわWツンデレってなかなか居ないけど、流石2-A！っと行っておこう

「まあ俺は買い物してくから、先に着替えてきな。俺の家はマクダウェルの家の隣で、同じような洋館だから。あとは見ればわかると思うよ。」

「了解や」

木乃香は元気やなあ。まあ正直魔法ばらしたかったんだけどなあ。今のまま置いとくよりか魔法を教えたほうが安全だし。

親が教えたくなくともその親には、関東呪術協会の長としての役割がある。長になったからには極力私情を持ち込まないのが鉄則。何に、次期当主に親として魔法を教えたくない？巫山戯てるのか！って感じだよ、まったく。

俺の立場ならばらしても、なんやかんやで保護してもらえるだろう。普段呪いにしかならんが、こういうときにやたすかるな。

ん？いつそのこと明日菜にもバラしちゃうか？一応重要なポジションだからばらして有利になれど不利になるようなことはない・・・。筈。学園長が上手く隠蔽してくれたら助かるんだけど、そうは上手くいかないもんな。やるには博打すぎる。木乃香は孫娘だし確実にいけるんだろうけど・・・。

それはともかく

「出てきたらどうだ？バレバレストーカー・刹那。」

「なんかその嫌な二つ名のような呼び方やめてください！」

めっちゃ嫌そうな顔してんなあ。

まあこいつははじめっから盗聴してたから敬語じゃなくても構わんだろ。

「事実だろ。木乃香も良く気づかな。周りからはバレバレだぞ。」

「そ、そんなはずはっ！

「あるんだよ。まあいいや、なんださっきから。殺気というか嫉妬の視線がうざかったぞ。」

背筋にピリツとくる感じ俺は嫌いなんだよ。殺気は慣れてるけど嫉妬は慣れてないんだ。

しかしやっぱりこのちゃんLOVEなんだな。選択肢みすったら病みそうで怖いわ。

「そ、そうでした！先生！いくら実習生でも生徒を家に招くのはいけないと思います！もしなにかお嬢様になにかあったらどうするんですか！？いえ、それより貴方がお嬢様に何かしないとも限りません！護衛としてこれを見過ごすわけには・・・」

「つまりは・・・一緒に来たいと？歓迎だよせっちゃん！俺のうちは聞いてたからわかるだろ？まあいいや、このままつれてって上げる！」

「え、ちよっ！違いますって！私は――」

「ベルゼ！せっちゃんをうちにご招待だ！」



「Tes.」

「あなた誰ですか！？や、やめてください！目隠しはわかりますがその右手のモノはなんですか！？え？！か、体が動きません！！」

「ボールギャグです。安心してください。」

「安心できませんよ！むしろ猿轡より怖いですよ！なんかアダルテイです！！」

「ハハハハ！ベルゼの拘束から逃れたものは・・・あまりいない！」

「それ居るってことじゃないですか！？ちょっとやめむぐ！んむぐ！」

これで刹那は大丈夫だなw

自分でも疑問だが、今ベルゼは家の掃除をしてるはずなんだが・・・まあいいか。

俺はアスに買い物の手伝いを頼み（一瞬できた）大量の荷物を持ち家に帰った。

刹那は多分室内で拘束されてるからよかったけど玄関には明日菜と木乃香が既に待っていた。私服かわゆす至福。

「明日菜に木乃香。早かったな。」

「うん、迷うかもしれへんから早めに来たんやけど・・・」

「わかり易すぎよ！なによこの表札は！？でっかく「アキ様の家」って知らない人には全然わからないじゃない！」

「いやいや、俺が書いたんじゃないよ。アスが書いたんだ。」

隣で恥ずかしそうにしているアスを指しながら言う。ちなみに手をつないでたりします。

「その娘だれなん？ えらい綺麗やけどメイド服もよう似合ってるわあ。」

「確かにえらく様になってるわね。って！ 誰よ！？」

「アス、自己紹介を。」

「T e s. ご主人様の護衛とお世話をさせていただいている、アスモデウスと申します。」

「アスモデウス？ あの七つの大罪とかの悪魔と一緒にやなあ。親も変わっとるえ。」

「いえ、一緒というか本人ですの。」

「おい！ 口を慎め！！！」

「っ！ も、申し訳ありません！！！」

こいつは今までウェールズで引き籠ってたから秘匿への意識がうすいの忘れてた。

反応が遅かったせいで二人には聞こえてたようだ。やばいな。どうやって誤魔化すか・・・。



**ごかいめ キャラ作りは壊すためにあるのだよ! (後書き)**

やばいですね。課題ひとつもやってません。  
いまから徹夜ですよー!

ろっかいめ 着エロと言えは裸パーカー。私だけ？ (前書き)

投稿です。

ろっかいめ 着エロと言えば裸パーカー。私だけ？

ええ、私めはいま大変困惑しております。

「アキ先生が名付け親っていったい何歳なのよ!？」

「それより、先生のネーミングセンス最悪や!女の子に付ける名前やあらへんで!」

アスのことがバレたと思ったら俺〓名付け親と誤解されてたらしい。まあよく考えたら、魔法の存在を知らない人が本人とか言われても想像つかんわなWなにを焦ってたんだ俺は。それに俺だってアスモデウスなんて名前、女の子に付けたくないよ。でももともとこの名前だからしゃーないじゃん。

「ちがうぞ?俺は名付け親じゃないぞ!?アスに出会ったのは6年位前だからこいつはもう名前もってたって!」

「そ、そうですよ!ご主人さまに名前を貰うなど恐れ多いこと・・・!」

「・・・まあ今は納得してあげるわ。でも!ひとつ聞きたいんだけどいい?」

「あ、ああ。なんでも聞いてくれ。」

あまりの剣幕に少したじろいってしまったが答える。  
すると明日菜と木乃香は顔を寄せ合って何かを確認してるみたいだ。  
共通の疑問だろうか?

少しするとかかなり緊張した面持ちで二人が近づいてくる。

「「ご主人様って先生が言わせてるの（てるん!?）!?」」

あ、あ・・・ああ・・・。こっちのが危ない誤解だ・・・。違うぞ！断じて違うぞ！俺はそんな趣味なんてない！・・・嬉しいけど。俺は言っていない！

「あ、あす・・・頼む。」

精神が・・・。あらぬ誤解は心に響きます・・・。

「T e s. これは私から説明いたしましょう！ご主人様からは名前と呼べと言われましたが、私のような者が名前でお呼びするなどとんでもない！私からお願ひしたのです！あと、ご主人様はノーマルです！常識以外は・・・！」

「ちよつとまで！俺に常識はないと言うか!? いやある!! しつかり節度をもって人様に迷惑かけないようにしている！」

「あゝ、たしかにね。常識はずれなところあるわね。」

「授業とか無茶苦茶やしなあ。」

「木乃香も煽ってるでしょうがッ！」

な、なぜだ!? 俺はネタに走っても一応真面目なはずだ! そのはずだ!

「いえ、まず存在が常識はずれなので。」

「ベルゼ！貴様もか！？」

どこからともなく現れたベルゼが一言加える。

「それよりアキ様。刹那様が限界です。早くお入りください。」

む。せつちゃんのこと忘れてた。ああ・・・まあいいか。

「まあ、とにかく中にどうぞ、皆様。」

自宅なう

「むっ！んむううううううう！！！！」

「せつちゃん！？」

「むが、むぐううううう！！！！」

ああ・・・やばい。

拘束椅子に座らされていたせつちゃんはボールギャグのせいで涎があふれ、羞恥でか顔は紅い。

若干涙を溜めた目と暴れて着崩れた制服がエロさを醸し出している。背徳感抜群である。

「ぷはっ！な、何をするんですか！そして遅いです！この格好、とてつもなく恥ずかしいんですから！」



「な、なんでせっちゃんがおるん？」

「と言うよりさっきに犯罪臭がやばいんだけど。この先生大丈夫かしら。というか私たちは無事に帰れるの!？」

「木乃香に会いたくて追いかけてただけど、出る勇気がなかったみたいだから誘ったんだよ」

「え、あれって誘ったていうの? どう見たって誘k」

「せっちゃんほんまなん!? うれしいわぁ! ずっと避けられてる思うてたんやでえ!」

「あれ、私はスr」

「お、お嬢様! いえ、これはその・・・あの・・・」

明日菜がorz状態になった。そこにベルゼが近寄る。  
ベルゼは明日菜の肩に手を置き・・・

「諦めてください。」

「どういう意味よそれ!?!」

ごめん、俺にもわかんない。

時間は進み夕食後。

「木乃香、明日菜。」

「ん？どうしたん？」

「なによ、いつになく真剣ね。」

「魔法があるって・・・信じるか？」

「ちよっ！先生！？」

「明日菜、たのむわ」

「おk、黄色い救急車ね。」

「いやちよっと待てよ！なんでそんなことに！？俺は正常だ！」

なんでいきなり精神異常者扱いされなきゃいけないんだよ！

え？いきなりそんなこといったら普通だ？

いや、冗談として捉えるとかあるだろ！？なんで精神おかしいことになるんだよ！？俺そんなに真面目なのが珍しい！！？

「「うん（はい）」」

地の文読むなよ！それに肯定かよ！

おいこらアスとベルゼ、それとなぜかいるベルフェ。なに頷いているんだ、そして余りものを食うんじゃない明日の弁当になるんだ！

ここまで金をかけるのは稀なんだぞ!?

「まあいいんだ、納得させればいいんだからな。アス。」

「T e s. 永遠の氷河」

さすが悪魔、無詠唱でも高威力です。場所を限定してるからテーブルの上が全て凍った。食ってたベルフェも。でも気にしないのが悪魔クオリティ。呆然としている明日菜と木乃香に今まで隠し通して来たことがあっさりとバラされ放心のせっちゃん。

「ok?」

「「把握」」

「と言うわけで魔法があります。ちなみに木乃香の父親は関西呪術協会という魔法使いの長です。そして明日菜。お前が重要だ。」

「え? 私はこれだけなん? 内容的に爆発発言ばいんやけど。」

「残念ながら明日菜と比べたらそんなもんだよ。」

旧世界の協会の次期当主と滅びたはずの国の王族。比べるまでもない。  
ばらしていいのか? いいだろ。この家は防犯対策バッチリだから邪魔されない。

「明日菜・・・アスナは記憶喪失だろ?」

「まあ・・・。」

「馬鹿だろう？」

「クッ！否定できない！ってなんの関係があるのよ！？」

「簡単だよ。お前は記憶喪失じゃない。思い出せないだけだ。魔術的に封印されてる。」

「え・・・？」

「うわ、なんか重い話やった・・・。」

木乃香はなんだと思ってたんだよ。

ってか普通疑問に思わないかな？親族タカミチだけって・・・。特例でのバイト許可。記憶がないのに誰も効かない。まあこっちは気を使ってるって言われればどうしようもないか。とにかく優遇されすぎなんだよ。

「しかし封印を解くわけにはいかない。なぜなら前の人格に今の人格が塗り替えられてしまう可能性があるから。実質今の神楽坂は死ぬかもしれないってことだ。」

「じゃ、じゃあどうするのよ！？」

「簡単だ。慣らせばいい。記憶についてのヒントを与えるんだよ。いいか？聞き逃すなよ？誰かに聞くのもダメだ。」

「う、うん。」

「アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフユシア。ガ

トウ・カグラ・ヴァンデンバーグ。この二つの名前を忘れるな。」

「ガトウ・・・ガトウ・・・っ！？いたっ！」

「明日菜!？」

ガトウの名前に反応しているようだ。しかしまだ時期じゃない。いきなり思い出すのはまずい。

「木乃香は落ち着け。オイ明日菜。思考を止めろ、考えるな。無理に思い出そうとすると記憶全体がダメになるぞ。」

「う、うくう・・・!!」

二、三分待つと明日菜も落ち着いてきた。

まあ問題ないだろ。刹那？いつの間にか気絶してた。後ろでベルゼが嗤ってたのは気のせいだ。

「あゝ大丈夫か？」

「ありがと、もう大丈夫よ。」

「とまあ、明日菜のことは自分から話すときが来るだろ。で、お前らの武装だが。」

「え、魔法教えてくれるんちゃうの？」

「それでもいいが俺は使えんのよ。俺の従者も基本規格外だし。」

「・・・ねえ？ひとついいかしら？アンタは何もんなの？」

何者？生もの。人間。魔王。まあ色々あるな。  
ってかこんなこと聞くか？普通。直球すぎんだろ。

「んー、お前らの言うところの魔王・・・かな。従者たちも全員悪魔だ」

「ということはさっきの名前云々もほんとなわけね。」

「まあそうだな。あいつらの生まれた時からの名前であり、象徴だ。馬鹿にするんじゃないぞ？」

わかってるわよ、と拗ねるように呟く明日菜。

木乃香もなるほどと聞いている。

まあ理解してくれたようで何よりだ。

「で、木乃香。刹那はお前の護衛なわけだ。ストーキングしてるようにしかみえないし、護衛の役割果たしてなくてもそうなんだよ。護衛対象を避ける護衛なんて初めて見たぞ。」

まあバレないように守り、自分も生き抜くほどの実力があるなら大丈夫だが、こいつは剣士としても半人前、護衛としゃちゃひよっこだ。んな器用な真似できるわけない。

「だいぶ話がそれだが、これが武装だ。」

二人に御札を2枚とブレスレットを渡す。

「ねんか安っぽい・・・」

「この御札は紅いのが攻撃。大体半径10メートルを焼き尽くすくらい炎が出る。」

「危険すぎよ!」

「んで蒼い御札は核兵器にも耐えられる防御結界を半径5メートル程に作り出す。ok?」

「最初はこれだけ?って思ったけど違うわね。火力有りすぎよ!」

「でも大は小を兼ねるってよく言うやん」

「あんたは順応早すぎなのよ!なんでもう魔法使えてるわけ!?!」

木乃香のむく!とやって火をだしていた。すごい才能。やばい。ちなみにそれは気だ。魔法ちゃう。

「才能だろ。まだ説明の途中だぞ?」

「あ、すいません・・・。」

「よろしい。で、そのブレスレットは念話・・・テレパシーとでも思っておけ。それができる。あと生命に危機が迫ると俺のどこかで転移するから、強制で。お風呂場とかで襲われるなよ。」

「全裸であんたの前に登場。私は露出狂ってわけね・・・。」

「そゆこと。」

「なあなあ明日菜あゝみてゝ!」

なんだがすごく楽しそうな木乃香の言葉に釣られて見てみると式神を作っているこ木乃香がいた。

式神の形は・・・鳥？鳳凰みたいなシルエットだ。扱いが完璧じゃないのか顔などはない。

隣にベルゼがいた（底が知れない…）恐らく教えてあげるんだろう。説明させると擬音ばかりになるタイプのやつだが木乃香ほどの才能があればそれでも出来るんだろう。

「木乃香様は才能があるんですね。ベルゼの説明で実行できる人を見るのは初めてです。」

「ええ、才能の塊のような方ですよ。補助系に向いているようです。が陰陽術なら殆ど普通以上の適正です。魔力も腐るほどありますし、西洋魔術でも最強の後衛になれるでしょう。彼女の立場上、陰陽術をお教えしました。」

そうだな。西洋魔術を覚えさせると関西からの刺客の量が倍になりそうだ。

「む・・・ここは・・・。ハッ！先生！長はお嬢様に魔法に関わらせるなど！それにそう安易に一般人に魔法をばらしてはあなたもただではすまないはずです！」

「ハハハッ！もう手遅れだ。お前の立場も彼女の立場も教えたし、何より彼女はもう魔法を行使している。大体関西の長がおかしいんだ。魔法をばらしたくないのに何故、魔法使いの本拠地に送り込むんだ。」

「それは長にもお考えがっ！」



「それによりによって麻帆良。これはダメだ。関東の長として一番やっちゃいけない。関西の次期当主が何故関東の本拠地に行くんだ。俺からしてみればそのまま京都に住まわせたほうが秘匿できるし安心だ。」

「つまり？」

「長の馬鹿」

「いやまあ・・・聴いてると納得できちゃいます・・・。」

「大方、学園長の口車に乗せられたんだろ。あのジジイ、油断できねえからな。身内だろうと使えるもんなら使うタイプの人間だ。学園長の言葉は常に疑って掛かれ、と助言しよう。」

「しかし学園長はどうしてそんなことを？その口振りだと目的は分かっているそうですが。」

わかってるよ？だからこうしてジジイの管轄外のところで魔法をばらしたんだ。ネギがいると口が滑ってどんな秘密だろうと話しかねんからね。試験中もだめ。監視が常にあるから。

「恐らくネギの従者候補。木乃香をネギの従者にしたいんだ。アレでも英雄の息子だし。」

「先生もそうなのでは？」

「俺は魔法は一切使えんって設定なのだよ。もうばらしたけどねw」

「「設定なんだ・・・。」」

「当然。本気になれば地球壊すくらいなら出来るぜ。ま、やらんがな。」

「「出来るんだ!?!」」

「疲れるしやらないよ。あ、お前たち、もう門限じゃないのか?」

「うわ、やば! 木乃香! 行くわよ!!」

「準備完了や」

「それでは、失礼します。」

明日菜とせっちゃんはダッシュ。木乃香はローラースケート?どこから出したんだよ。

「木乃香～～! 式神仕舞え～～!」

「あ、忘れっとた! 先生頼むわ～～!」

黒い鳳凰。不気味すぎる。ラスボス臭がする。

「クワッ!」

「うわあ!」

「「・・・・・・」」

(可愛い・・・！)

俺はこの鳳凰に魂を与えた！

これでも魔王。魂の貢物は多いんだよ。

「これで悪魔になったな。俺のものだ。ってあれ？なんでお前そんな大きく・・・。」

「アキ様、先程の魂は先日決闘で討死した上級悪魔のものです。力も大きくなるのは道理かと・・・。」

結果この鳳凰（名前は募集してみる）は2m程になり、うちの地下を守り続けている。

※地下室はアキのプライベートゾーンです。研究所から寝室まで。

その時の皆

エヴァ

「まったく、恥かせよって！帰りのたびに声をかけてやってるのにどうしてそんなに無視するんだ！」

「いえ、マスターの声が小さいだけでは？そんなに恥ずかしいのですか？」

「ええい！うるさいこのポケロボが！巻いてやる！」

「ああ、いけませんマスター。もっと優しく・・・!」

木乃香 AND 明日菜

「明日菜今度は水が出せたんよ! さっきは花がいきなり咲いたんよ!」

「あんたはどうしてそんな・・・。才能って、そんなんじゃ納得しきれないわよ・・・。」

「そういえば明日菜。うちが使う力をおんなじもんをアスナが走るとき感じるんやけど?」

「私もそちら側と言うことなの!? ねえ! 答えてよ木乃香!」

「ど、どしたんいきなり!」

天然チートの集まりであった。

ろっかいめ 着エロと言えば裸パーカー。私だけ？（後書き）

ひっそりと鳳凰（黒）の名前募集してみます。

思いついた、もしくはわ回答があったら決めます、

タイトルが七回目になっていたw

## ななかいめ キャラを紹介してみる（前書き）

ネギ到着までまだ時間が掛かりそうなのでキャラ紹介を先に載せちゃいます。

## ななかいめ キャラを紹介してみる

主人公たちの設定。

アキ・スプリングフィールド／主人公・魔王

容姿 アリカ姫が男装してる感じ。結構違和感ない。髪は肩当たりで束ねており、所謂ポニテ。

能力 指輪⇒従者の悪魔（要は全て）を召喚できる。それと隠された能力が・・・？

魔力⇒濃度の特別濃い特殊な魔力。精霊を介さず神秘を起こせる。

この魔力で魔方陣を使用すると、通常魔力でも神秘を起ここせる。

武器 絶刀・鉋、斬刀・鈍⇒趣味で制作したもの。原作の巻数順に今後作っていく予定らしい

その他ネタ武器⇒書いていると正直めんどくさくなるほどのネタ武器。西尾作品を中心としている。

好きな物、事 楽しいこと 自信過剰な人の心を折ること 可愛い物  
嫌いな物、事 面倒 辛い物 台所の黒いG ホラーとか 精神的刺激物

説明 基本的に刹那的快樂主義者。楽しみのためなら手段は問わな

い。但しお気に入りの人物などに危害を加えるようなことは嫌う。もう規格外という言葉ですら当てはまらないほどチート。でも大きな力はずまらないので極力使用を控えている。ただし保身については常に完璧。

幼少期は家族とも仲良くやり、ネギとも仲のいい兄弟であった。

しかし魔王となって以来、転生の記憶もはつきりし、周りを見る余裕が出来てからは嫌うまではいなくとも、ネギを遠ざけている。アキにとってネカネが唯一の母親や、姉のようなもの。

魔法学校では、実技では底辺だったが、座学では常にトップに立っていた。

禁書庫で攻撃魔法を盗み見るのに隠れてついでに行き、結界や、精神操作についての魔法書を読んでおり、そちらの方面は右に出るものはいない。特殊な魔力を利用し、幻術や認識改竄、小規模な世界構築など、もうチートとかそーいうレベルではない。

体には、結界系を応用した肉体強化系魔法を常時展開している。濃度が特殊なため大きすぎる力に、違和感を抱くことができない。

戦闘について

力を使って戦うとつまらないため、体術、剣術、高速戦闘をメインにして戦う。

肉体強化は常時発動以外はめったに使わない。（まあそれでも規格外だけだね）

詠唱が必要な魔法も、一通り無詠唱で無理やり発動させることもできるが、何故か威力が爆発的に上昇すつため、敢えて詠唱している。脅しや、心理的恐怖を煽るためなどで無詠唱を使うことが多い。主に使う武器が絶刀・鉋。魔法を取り込んでも、受けても傷一つ入らないところが魅力らしい。

パーティーでは奇襲役。



アスモデウス／従者・妾？

容姿 身長は160cm位。黒髪で腰あたりまであり、触覚が2本ある。顔はキリツとした感じ。硬派なギャルゲの

女騎士みたい。

能力 騎乗A⇒f a t eぽいのは気にしない。どんな乗り物でも乗りこなせる。伝承の為？

武器 槍⇒元が天使であるからか神秘性の非常に高い槍。魔に属するものに大ダメージ。錆びない。

龍⇒使い魔のような存在である竜を呼び出せる。竜騎士にジョブチェンジできる。

好きな物、事 主人 アキに愛でられること、役に立つこと  
嫌いな物、事 主人の敵 むさ苦しい人 愛でられるのを邪魔されること

説明 ランダム召喚（但し♀専門）をアキが使用した際、一番初めて出てきた悪魔。初めは従者として真面目に仕えるも、しばらく暮らす内、アキを愛すようになる。絶対の忠実を誓っている。

愛してはいるが、正妻だろうと興味なく、愛されるならそれでいいと思っている。残念、ヤンデレにはならない。・・・が、アキに加害を加えるものには・・・！！！！

戦闘について

本気の場合、竜に乗りヒットアンドアウェイ。長槍と盾を持って戦う。

従者と言っても多数の配下がいる頂点とは言わないが王。魔力も戦闘能力も規格外。

相手の精気を吸い取る攻撃もできるがアキ以外にする気はない。所謂天然というやつで、肝心なところでミスをするため、日頃の訓練は欠かしていない。

ベルゼブブ／従者

容姿　ぶっちゃけセイバー。髪が少し長くなった程度。

能力　変身⇒元の姿である蠅や豹。本人は嫌い。

炎操作⇒炎を操れる。どこでもお料理ができるイケてる能力。

武器　槍⇒主人公が闇市で買い与えた物。宝物。

携帯杖⇒ポッターがもってるような短い杖。集中時使用。

好きな物、事　アキの観察　お世話　甘い物

嫌いな物、事　食事を取り上げられること　主人に外を為す奴

説明　アスモデウスがアキに紹介し、召喚された。アスモデウスとは旧知の仲であり、親友のようなものらしい。

同じくアキに絶対の忠実を誓っており、手の掛かる弟のように思っている。

従者のなかで戦闘力なら一位、二位を争うほどの力量。しかし自ら振るおうとはあまり思っていない。

忠実を誓った頃アキにプレゼントされた長槍を宝物にしている。本人は弟見たいと行っているが、その槍へに思いは恋する乙女のソレである。無自覚らしい。

戦闘について

やばい。色々やばい。もう実力しってたら戦うくらいなら自害したくなるほどやばい。

魔力未使用のアキと互角にやれる。炎を使い、それをうまく使い、槍と炎の波状攻撃は上級悪魔でも食らったら消滅するレベル。突きが一々音速突破してる。炎の動きもはや亜音速。

魔力でのブーストで近づき、防御させるまもなく波状攻撃で仕留めるアサシンタイプ。

ベルフェゴール／癒やしの存在

容姿 あれだよあれ、ISの本音ちゃん。但し黒髪。

能力 視察⇒指定した範囲、相手の状況を覗き見ることができる

武器 大剣⇒メイン武器。2mくらい。アキ手製。何処にでもあ・  
・ねえよwwwwな性能。まあぶっちゃけ物凄く固

くてものスツゴク太い。なんでも叩き切れます。

ナイフ⇒針に見えるような薄く細いナイフ。なんでも貫通するけど細すぎて気づかないかも

好きな物、事 昼寝 お菓子 暇  
嫌いな物、事 忙しい状況 うるさい場所、人

説明 基本的にぶかぶかな寝巻き。アキ成長後はアキのYシャツ。狙っているとかではなく落ち着くらしい。従者というより仲のいい友達？（それでいいのかアキ…）

怠惰の名を持ってあるだけあり、基本的に寝るか、お菓子を食べている。武器が大剣、しかもかなりごつついのは早く倒してねたいから、という言葉聞いたアキが制作し、それを気に入ったため。もうほんと仲のいい友達だよね。

本人曰く2日に一回アキに抱きつかないと禁断症状を起こすらしい

戦闘について

一撃必殺型。仕留められなかった時用にナイフに魔力を込め、爆発させ仕留める。

この武器を操るだけあって、怪力で見た目に合わずすばしっこい。基本的眠そうに目を半分閉じている。アキでさえ、目を見開いたところを見たことはない。

本人曰く、目を開けるときは必ずアイエを仕留めたいときだけ。なので本気モードでできる状態になるのだとアキは予測している。

実力派かなり高い。衝撃波をだし、遠距離にいる敵も攻撃することができる。この県の大きさからわかるように、衝撃波もかなり大きく、スピードもあるので、本気を出せばベルゼに届くのではないかと皆噂していりほど。

アスモン／工房管理人

容姿　ISの千冬さんを少し優しくした感じ。セミロング

能力　制作⇒魔術的な意味合いを持つ道具を制作できる。

調整⇒自身の魔力限定で、精密、且つ高速で微調整できる。  
頭の中では数字やらなにやらが大変なことに！あわわわわ

武器　不特定⇒能力二つを最大限に生かし、自分の想像した武器を瞬間的に創造して使用する。

影操作⇒なの通り影を操作する。入ったり武器にしたり。

好きな物、事　物作り　紅茶  
嫌いな物、事　騒がしい場所　工芸を蔑ろにする人

説明　工房を管理するという。穏和な性格で、アキが呼び出さないと戦闘などしないほど。

工芸を心から楽しんでおり、ほかの人間にも基本的に優しい。麻帆良の科学力に興味を抱いているご様子。

アキへの感情は弟のようなもの。ベルゼと違い、本当に暖かい視線でSキを見守り、時に助言している。

戦闘について

滅多に戦わないが、戦い方のエグさは上級。

短い剣を持ち近接を挑み、打ち合っている最中に周囲の魔力で針や、剣を作りじわじわ攻撃する。雑魚相手だと、その攻撃だけで串刺しになる。剣、槍、弓、斧、乾など、多彩な武器を使いこなせる

その他簡単に

レヴィアタン⇒今だ登場せず。

アキを好いており、彼のために行動を色々起こすが、失敗。折檻され続けているうちに新たな道を開いたかわいそうな悪魔。本編では陰ながら活躍するキャラにする予定。

エヴァちゃん⇒一応メインヒロイン

からかわれ役で、なぜか普段真面目な人にもからかわれる魅力がある。

アキは彼女の飴、一人前になるべき頑張っている・・・が、ただれた生活を直すべき。

ゲーマー

改変木乃香⇒チート過ぎw

話だけ聞いてなんとなくで魔法を成功させる天然チートキャラ。

ヒロイン的立場になる予定。

改変明日菜⇒封印記憶解除中

チート原作キャラ。気を意図して使うことにより、運動神経がさらに上がった。

記憶の封印を弱められているため、何日かに一回、夢で過去を見るらしいが、いまだ鮮明に見えず。

改変刹那⇒かわゆすw

ドジっ子属性が強化されている。

木乃香と話しているといつい本音が出て、毎回からかわれている。  
魔法も知ったし、そろそろ羽のことも話そうかな？と悩み中。

## ななかいめ キャラを紹介してみる（後書き）

黒い鳳凰について。

零崎煌識さんの黒凰クロウを使わせていただきます！ほかの方も、アイデアありがとうございます！

黒凰クロウ⇒アキのペット兼番人

単純に強い。爪などでひっかいたり火を吐き攻撃する。  
背中には一人ほどなら乗れる。早い、すごい早い。  
倒れても器の式神に戻り、再び魂を与えることで生き返る。



**はちかいめ 数少ない俺の敵わない奴（前書き）**

調子に乗っちゃった。でも後悔はしてないよ。

ではどうぞ。

## はちかいめ 数少ない俺の敵わない奴

こんにちわ、アキ・ス（ry  
現在まじめに仕事中です。

「あ、新田先生。すこしこちらを見てもらっていいでしょうか？」

「これは……。すごいですね。一人ひとりの弱点を突いてる。これなら2－Aの成績も上がるでおもうぞ。」

我がクラス2－Aの点数の底上げのため、一人ひとりプリントを作ってあげているんです。

いろんな先生から進んでいる範囲を聞きだし、小テストをHRでして、個人に合った重要なポイントをまとめているんです。どうだ！教師の鑑のような行動だろ！

そんな感じでプリントをさつき政策終了したので学校で提出する前に新田先生にチェックをしてもらったんです。評価は問題なし！

「えゝそんなわけでプリントを作ってきました。各自家でやるように。来週のHRに回収するから見直しかしてくださいね」

『ええゝゝゝゝ！！！！！！！！！』

「あくまー！」

「おにー！」

「そー言うだろうと思ってほかの先生の宿題はなしにしてもらいました。各教科10問しかないこのプリントか、ほかの先生の宿題を通常通りもらうかどっちがいいですか？」

「きゃー！先生大好き！」

「最高！」

「抱かれてもいいくらい！」

「抱きません。そんなわけで本日は解散です。号令！」

「きりーっ！れい」

『ありがとーございました！』

「鳴滝姉妹、春日。ちょっときなさい」

「「どうしたの？」」

「なんすか？」

「俺は悪魔らしいな。ほら悪魔らしくプリント三枚追加だ。」

「「「そ、そんなあゝゝゝゝ！！！！！」」」

ふゝ。こいつらは何かあるとすぐ暴れようとするからな。小さいこ

とでもこうやって注意していけば原作開始までにはまともなクラスに……って夢の見すぎかw

取敢えず最下位医は脱出したい。苦手なところ十ヤマカンのプリントだ。しっかりやっていれば底上げはできるだろ。

「あ、神楽坂と近衛く！」

「どうしたのよ」

「どうかしたん？」

「いや、前教えた魔法についてさ、あれ、ほかの魔法使いにばれたら記憶消されるから。」

「……ってちょっとおおおおお！！！！なんでそんな大事なこと言わないのよ！てゆうーかそんなこと教えないでよ！」

「うちはもう使えるから大丈夫なんやろ？」

「そそ。でも明日菜はなんにも使えないじゃん。まあ大丈夫だと思うけど。ほら、明日菜魔法無効化能力もってんじゃない」

「そっちも初耳よお！！！」

「明日菜凄いなあ」

「まあその能力バレてからの安全は保証しかねるけど。」

「なによそれ！私危険だらけじゃない！？」

んなこと言われてもなあ。文句言いたいなら母親に言えよ。  
生まれが生まれだからねえ。明日菜もネギみたいに王家の魔力が薄  
ければよかったのに。あ、そうだったらここにいないか。まず完全  
なる世界に目を付けられないしw

「だからあれだよ。渡したじゃん？護符。」

「せやなあ、あれがあれば安全やおもうよ？危険やったら先生の  
ところ行くんやし……。」

「うぐ！ま、まあ要は誰にも言うなって言いたいのね？」

「うん。よろしく。おれの立場とかも考えて行動してくれよ。」

「はいはい。でもアンタ、こうゆー話し方に馴染むと授業がむず痒  
くて仕方ないわよ……。」

「話し方とか全然ちゃうもんなあ。そこまではつきり分けれるのは  
すごいよ？」

「まあほらそれでも王だからさ。公私分けたいのさ。出来てないら  
しいけど。なんだったら敬語に戻してやろうか？」

「やめてよ！？聴いてると笑いそうで集中できないわよ！」

「そこまで酷いか……。」

笑いそうって……。おれ、そこまで分けきれてないかな？いや分  
けすぎてんのか？

しかしこう面と向かって言われると心にクルわあ。

「つか聞いても理解できんだろ明日菜は。」

「し、失礼ね！・・・は、半分くらいはわかるわよ！」

「自慢げに言うんじゃない。しかも見栄張ってるのがバレるぞ。吃りすぎだ。」

「五月蠅いわね！少しくらい見栄張ったっていいじゃない！どうせ私はちっとも理解出来てませんよー！」

いやそれはそれでまずいだろ。なんのための授業だよ。まあそこらへんは明日菜がアスナとしての記憶に目覚めたら改善されるだろ。・・・多分。

「まあお詫びと言ってはなんだが、そのプリントの内容、殆どテストに出ると思うぞ。」

「マジ？」

「マジマジ。それ覚えときゃ平均以上行けたら・・・いいな。まあひねった問題も出るけどそのプリントができるようになりゃ出来るだろう。」

そのプリント基本問題しか書いてないけどな。こうでも言っときゃ真剣にやり込むだろ。

と・・・学園長に話をしに行こうか？いや、まだいいか。いつかバレルだろ。

「そんなじゃ、頑張れよ。・・・あ、木乃香、式神はこっちで魂与

えといたからうちにくればいつでも会えるぞ。」

「ほんま！？さすが先生、もう大好きや。」

「ハハハハ、将来は一夫多妻の国に行くかな・・・ゴハッ！」

「もう！いややわあ。」

木乃香さん・・・顔赤くしてクネクネするのはまあ構わないけどな  
んで金づちで殴るかなあ・・・  
しかも俺にダメージ与えるとかもうギャグとしか思えないんだけど・・・。

※ギャグ補正です

「でさあゝ今度暇があったら頼みたいわけよ。」

「知るか！なんでそんなことやらななんだ！」

えゝと場所は変わってエヴァちゃん家。

暇なときに木乃香に座学の方と魔法世界での常識を教えてもらおう  
と思ったんだけど切り捨てられたよ。

「頼むよ、教えたはいいけど魔法に危機感持たせとかなないと後々めんどろになるじゃん？でもほら、俺って最強だからそんな細かいこと気にしたことないんだよね。そんなわけでエヴァに頼みたいんだよ」

「自分で最強とかいうなそして一々癪に触る言い方をするな馬鹿者！それはなんだ、私をバカにしてるのか！？そういえば初日も言ってたよな？悪の魔法使い（笑）だお！？確かに恥ずかしいのは認めざる終えんが、もっと言葉をオブラート的な何かで何重にも巻いてから発言しろ！私も気にしてるんだ！」

「あ、すみません……。」

いや、気にしてたんだ……。あんだだけ自信満々で言ってたからガチなのかと……。

それによく息が続いたな？吸血鬼補正？呼吸にまで？……羨ましい！

っと、話がそれたな。

「ひとつだけなんでも言うこと聞いてあげるからさあ……！」

「……なんでも、といったか？」

「うんうん、なんでも。」

「ならばお前の血を飲ませろ！それで我慢してやろう！」

「ok。交渉成立。」

「……あれ？即答？もつとな、なんだってー！ってきな反応は？」





イ」

ピンポーン。

「はい、お待ちください。」

「ちよっ！待て！俺が出る！お前は掃除に戻ってろ！」

「？はぁ・・・。」

ふう、落ち着け。まだ決まったわけじゃないんだ。ただ机に『バー  
ルのようなもの』があっただけじゃないか・・・。その前になにか  
言葉が入るわけでもないし。  
よし、開けるぞ。

ガチャ。

「今日わ。いつもニコn「人違いです」ボタンッ！」

「ひ、ひどいじゃないですか」

『あいつ』はドアの間に靴を差し込みやがった。

「知るか帰れ消えろてか死ねここはお前の存在していいところじゃね  
え主に俺のSAN値的意味でえ！！！！」

「あ、痛いですって！ちよ！マジで洒落にならないですよ！いまベ  
キッって言いえましたからあ！私の足が悲鳴をあげてますからあ！！  
！！」

「そのままちぎればいいんだ！」

「そんなマジ顔で怖いこと言わないでくだSイタタタタタ！！！  
こうなったら！ほんどりゃー！」

おい！なんで押し返せるんだよ！俺は刻印全開だぞ！？

「クッ！こうなれば宇宙CQCをつかってでも仕方ありませんよね！」

「やめろよ帰れよマジで！悪魔は歓迎だけど邪神イランから！迷惑だから！返品しますからあ！」

「とー！」

ピンッ！コロンコロン・・・。

そ、それはっ！

ドガアアアアアアンッ！！！！！

「というわけで、あなたの隣に這い寄る混沌、ニャルラトホテプです。」

負けた・・・。

始めて負けた・・・。

なんだよおれ、素である腕力とかおかしいだろクトゥールの混沌さ

んよ？

しかも室内に手榴弾投げ込むなんて正気の沙汰じゃねえよ……。なにが宇宙CQCだよ。ただの兵器じゃないかよお……。

「で？その這い寄る混沌さんがどうかしたのか？用事ないならかえれ。いやあっても帰れ今すぐに。」

平然と俺の家に居座る這い寄る混沌。ニャルラトホテプ。本人にはニャル子と呼べと言われた。

「実は最近仕事が無いんですよ。それで上司から休みをもらいまして……。っていうか有給を無理やり遣わされて。そんなわけでちよつとした思春期的な反抗でこの星に入ったんですよ。それからしばらく薄い本とかゲームとか買いあさってたんですけどあら不思議！私のこの邪神レーザーに大物がかかったんですよ。」

頭についた触覚をピョコピョコさせながら話す。自分で操作出来るのか……。

「それで好奇心からついあなたの部屋をあさってたんですけど……」

「おいこら、その飛躍はおかしいだろうが。なんで好奇心で俺の部屋をあさるんだ！ってかトラップはどうした！」

「あ、なんかいきなり攻撃されましたので壊させていただきました。ダメですよ？危ないもの付けちゃ。」

「……………」

「すみませんマジ調子に乗りすぎました罠の方は弁償させていただきます」

きます。だからその刀から手を離してください。」

綺麗な土下座だった。

「んで俺の部屋にこれを忘れたと？」

「そ、それは確かに私の『名状しがたいバールのようなもの』！ああ、ありがとうございます！」

ベキ！

「いきなり近づくな！殴り飛ばすぞ！」

「もう殴ってるじゃないですかあゝ！」

いきなり近寄られたら殴っちまうだろ普通。邪神なんだぜ？美少女でも。

「いいじゃないか。腕の1本や2本。気合で生やせ。」

「酷いですよ！だから謝罪したじゃないですかあ！」

「まあ話の続きだ。その邪神レーダーとかいう触覚の誤作動じゃないのか？ここに邪神なんて奴は居ねえよ。」

「またまたあゝ。こんな惑星の一介の魔王がそんなに強いわけないじゃないですかゝ。」

「お前を見てると自信なくすよ。マジで。で、結局何が言いたい？」

「私を泊・め・て？（はあと）」

「死ね。」

バキャン！

「う、腕があ！絶対曲がるはずのない方向に腕があゝ！」

「なんでこういうときは攻撃が通るんだよ……。」

「流石神懸かり的なつつこみ力！それを止めるのは無粋でしょう。」

もう復活してるよ……。おいこらさっきまで血だらけだった服まで戻ってるぞ。

クトウルー舐めてたなあ……。この世界のバグキャラじゃ追いつかないよ……。

「お願いしますよ！こころへんなら色々充実してますしそれに部屋は余ってるじゃないですか！宛がないんですよ！お願いとめてくださいい！」

「うわ汚ね！わあった！分かったからそのありえん量の涙と鼻水拭け！そして嬉しそうな顔して抱きついてくんなあ！」

俺は汚れた服を着替えてリビングに戻る

「ずず……。あ、美味しいですね。80点を上げます。」

「恐縮です」

「それは俺の飯だァ!!!!!!」

「ああ！私のご飯があ！って冗談です！少しからかってあげようかなあっとか思ってたんですよ？あ、この餃子もなかなか・・・。」

ジャラ

「居候の分際で調子に乗ってすいませんでしただからその禍々しい鎖を離してください」

こうして奇妙な共同生活が始まった。

**はちか いめ 数少ない俺の敵わない奴（後書き）**

なんかすいません。

笑いが足りないなあって思ってたら出しちゃいました。

まあ彼女はシリアスをシリアルにする役を担当してもらう予定です。

ご意見、ご感想お待ちしております。



**きゅうかいめ ゆうれいさんを飼うおはなし(前書き)**

遅れてしまって申し訳ないです。  
それに若干文字数が少ないです。

きゅうかいめ ゆうれいさんを飼うおはなし

「ほう？ ついに出来上がったか。」

『T e s. しかし効果は確かめていません故、ご注意ください。何分私たちが服用して効果の図れる薬ではないのです。申し訳ありません。』

「いや、十分だ。無茶を言ったのは俺だからな。そちらこそよくやった。」

『T e s. 恐縮です。それではどちらの方にお送りしましょう？』

「以前連絡した麻帆良だ。出来るだけ早めに頼むぞ。」

『T e s. それでは失礼します。』

今の電話はM A Sカンパニーの研究部からだ。

以前、俺はある薬の研究を頼んだ。もちろん人間に研究できるような代物ではない。

なんと魔力で体を構成することのできるようになる薬だ。これを魂、エーテル体に掛けることにより肉体が構成される。例えとしては襲撃者に使われる鬼。彼らは体を魔力で構成しており、召喚された状態で殺されても魔界にもどるだけである。

しかしこの薬は放射された魔力を自身に組み込むことができる。つまりその場で蘇生できるのだ。使用するのはエーテル体や魂。つまり不完全ではあるが死者蘇生もできるということだ。

悪魔の魔法薬はア世界一イイイ！！！！！！！

用途？クラスの相坂さよさんだよ。

こう一度目を向けたのが悪かったのか『見えてますか？』とか言いながら視界をうろちよろされる。半透明だから見えるっちゃ見えるけどなあ・・・。

そんなわけで夜の学校なう

「そろろ・・・。」

「そろろろ・・・。」

「そろろろろ・・・。」

「そろろろろろ・・・。」

「そrって誰だ!？」

「ひゃあ!どうしたん?いきなりい・・・。」

後ろには木乃香がいた。

って、なんでいるんだよ。尾行は確認してきたつもりんだけどなあ。

「いや、教室にノート忘れてもうてな。さっきまでせっちゃんがおったんやけど先生の影をオバケを間違えて逃げてもうたんよ。せっちゃんほホントかわええなあ。」

ああ・・・。そういやそーゆーの苦手だっけ?気配丸出しだから冷

静になれば判断できると思うんだけどなあ。

「せんせいはどうしたん？」

「少し除霊をね。」

「真逆、ほんとにオバケおるん？」

目を輝かせるな。

「まあ人畜無害な地縛霊がね。木乃香も魔力を目に通せば見れるよ。」

「む、むむむむ・・・」

途端真剣な顔をして魔力を・・・というより霊力か。

まあ魔を滅する力の多い近衛の家系だし別段問題はないか。

知ってる？いつもみんながやってる陰陽術。霊力で起動すると属性‘魔’に大ダメージなんだよ？

「うん、出来たようだな。じゃあ行くぞ」

「そういえばそのオバケ何処におるん？」

「2－Aだよ。」

一方その頃

「はっ！しまった！つい驚いて逃げてしまった！」

刹那は通常の状態じゃとても出せないような速度で駅に付いていた。

「お、お嬢様あああああ！！！」

刹那はまた全力で学校へ戻る。

時速59キロ位で。

まさに愛のなせる技・・・！

視点戻る。

「という訳で2－Aに到着しましたー！」（小声）

「いえーい！」（小声）

「どんな幽霊なんでしょうねえ、楽しみですねえ。」（小声）

からんからん

ふと異音が聞こえたよう気がした。

俺と木乃香は頷き合いそっと教室のドアに耳を当てる。

からん・・・からん・・・。

「・・・・・・・・・・。」

あいにくと声は聞こえないが何かいる！

（ホントやったんやな！）

（俺が嘘を付くわけないだろ。）

（（たのしみやなあ））

アイコンタクトだよ？

そつと中を覗くとシャーペンが空中でくるくる回っては落ちて、浮いて戻ってくるくる回っては落ちて。

ホラーだよ。怖すぎるよ。

まあ実際は相坂さんがペン回しを繰り返してるだけなんだけど。

「あー、木乃香もこんな日に忘れ物するなんてついてないなー」

「ありがとなー先生。態々付いてきてもらって。」

ものっそい棒読みでセリフを言いながら教室へ入ると、ガタツ！と音がして途端静かになる。

「今物音しなかったか？」

「さー？先生の気のせいとちゃうの？」

くだらない演技を続ける中、相坂さんは自分の机の下で、防災訓練



「さて相川さん、調子はどうだ？」

正直2，3日は待つことになるかと思ってた。

出てきた相川さんを木乃香はぺたぺたと触る。

「ふ、ふえ・・・？」

可愛いなあ。なんか凄く・・・飼いたい（はあと）

——ザサアアア！！！！

相坂さんが後ずさった。

「わわわあああわあたあししっしあををCwじゃVdのあdf  
ff！！！」

「あかん！もう人間の使う言葉ですらあらへん！」

「落ち着け相坂。深呼吸だ。」

「すーはーすーはーっ！！！！わわ、私を食べても美味しくありませんよ！？」

「誰が食うか！」

～～～事情説明中～～～



「だいたいわかりました。助けていただきありがとうございます。」

「ああ、これは君がよかったらなんだが・・・」

「はい、なんででしょう？」

「うちに（ペットとして）来ないか？」

「はい！喜んで！」

ん？

こいつは・・・真逆ドM！？

ペットと呼ばれて尚、涙を流しながら承諾した！？

「じゃ、じゃあこの首w」ガシッ

不意に肩をつかまれた。それはもうものっそい力で。

「先生え？ いかんなあ。生徒にそれはいかんと思うんや。」

「は、ははは・・・ジョウダンニキマッテルジャンイデスカ、コノカサン？」

ギリギリ・・・

まるで万力に挟まれているような・・・。

バキッ！メキ！

「ギャアアアアアア！！！！！嗚呼肩が！俺の肩があ！！！！」

「大丈夫ですか！？こ、木乃香さんもなにを・・・ヒッ！」

「少し借りてええか？大事な『お話』があってなあ・・・。」

「ナギヤ！く、首が折れます木乃香さん！！」

「フフフフ・・・」

「ガタガタガタガタガタガタガタ」

その時の木乃香はまるで修羅を超える存在に見えたと、後に相坂さよは語った・・・。

「と、取敢えずうちに来て。体持ってるし何時までも学校にいるわけにもいかないでしょ。」

「は、はい・・・。」

「じゃあウチはもう戻るわ。・・・先生？自重してえな？」

「ハイワカッテオリマス。」

フフフ・・・。と笑いながら木乃香はひとつの御札を取り出し消えた。

転移符だろ。アスから最近御札の制作、使用を学んでると聞いた

からな。

もともと学生に買えるような代物じゃないしな。一つ百万はするよ  
うなものだぞ？

発動も早いから多少無理してでも傭兵は懷に一枚は忍ばせていくと  
いう。命あつての職業だしね

「わわ、これが魔法ですか！？すごいです！一瞬で消えちゃいまし  
たよ！？」

「あれは陰陽術に分類されるな。」

「ほえー。すごいですね！」

「実はお前も便利な能力があるんだぞ？」

「なんですか！？」

「今制服だろ？お前が着たい服を想像してみろ。」

「ま、真逆・・・」

相坂さんも何が出来るのか想像がついたようだ。

まあ今の相坂の体は魔力で形成してるわけだから、任意で服装とか  
も変えるんだ。

まあ身体の情報に魂依存だから変えることはできないけど、ほかの  
体の服をかぶっている、と想像すれば不完全だが他人に変身するこ  
ともできるんだぜ？

「わあ！！すごいですよ！こんな可愛い服着てみたかったんです！」

相坂は純白のフリルのついたワンピースの姿だった。

「そうだな。それより今の時間、何時だと思ってるんだ？」

「ふえ？あ、あそこに時計が・・・って5時ですか！？もう朝じゃないですか！」

「そうだ、俺、眠い、明日、仕事。おk？」

「あ、はい、すみません・・・。」

なんだか落ち込んだ様子の相坂とともに自宅へついた。

「大きいですね。仲も綺麗です！」

「あ、大声はやめ・・・」

「ふあゝゝ。アキさんですか？こんな朝早くにどうしました？」

にや、ニヤル子お！！！！

なんてバットタイミングなんだ！しかもその服装はなんだ！？  
下着じゃないか！？

「いやあさっきまでゲームをやってまして・・・。おや、・・・ア  
キさんも隅におけないですねえ。女の子を連れ込むなんて・・・。」

「あきさんとは！その・・・。」

「私の事は気にしないでいいですよ。ごゆっくりー」

冷蔵庫からドクペを出して自室に戻っていった。  
しばらくすると相川が顔を赤くして……。

「え、えっちいのはいけないと思います！」

「ちげええよ！！！」

おまけ・その後のエヴァちゃん家

「ふう〜ん。珍しいな、お前がそんな人助けするなんて。まさか、  
また惚れでもしたか？」

「新薬の実験にもちようど良かったんだよ。それに授業中に視界を  
ウロウロされるのは気が散っていけない。それと……」

「それと……？」

「俺は何時までもエヴァちゃんが好きなんだぜ？　そう簡単にほかの  
子に惚れた何かしないさ。惚れたとしても、まずはエヴァちゃんを  
いただいてからだよ。」

「ばっ！　お前よくそんな恥ずかしいことを／＼／」

「ふふふ、ツンも好きだけど、早くデレをみたいねえ。じゃないと  
つい茶々丸さんに手を出しちゃうかもしれないよ？」

「あいつは確かに家族だがガノノイドだぞ？」

「あんだけ感情を丸出しにしてるし、知ってるか？あの体にはもう  
しっかりとした魂が宿ってるよ。魂ってのは子として生まれてもも  
らえるが、あれだけ人間に似せたんだ。魂が宿ってもおかしくない。  
」

「そ、そうか・・・。」

エヴァの顔は心無しか嬉しそうだ。

やはり家族で有る茶々丸が人間として見られたことが嬉しいんだろ  
う。

「そ、それで相坂さよはどうするんだ？」

「しばらくはうちにいるね。学校の記録によれば学園長の同級生だ  
そうだ。話を持ち出せば生徒として学校に通わせることもできるだ  
ろ。」

「確か60年だろ？正直、60年前のジジイが普通の人間だったと  
は思えないんだが・・・。」

「それについては同感。昔も後頭部はあんなことだったのか、気に  
なるね。」

「ククッ、さぞ虐められただろうな。」

「ク  
ツク  
ツク  
ツク。  
」

## きゅうかいめ ゆうれいさんを飼うおはなし（後書き）

さよの立ち位置に付いてかなり悩みましたが、あくまでアキと仲のいい、一般生徒。としての扱いになります。学園長グループ、ネギグループ、悪魔グループどこにも属さず、中立ということになります。魔法は、学園長サイドとアキが二人で教えます。

さて、ここでアンケートを！

次回、遅れながらも10000ユニーク記念特別編を出そうと思います

10万PVも近いのでちょうどいいと思ひまして。。。

？ If 番外編『魔王が聖杯に呼ばれたようです』<sup>アキ</sup>

？ 番外編『とある会社の業務記録』

？ 特別企画『アキのエヴァちゃんデート計画！』

この中から、何か一つを執筆しようと思ひます。

？と？はだいたい構想が出来ています。

いつもどおり早ければ5日程で投稿できるかな？

？は・・・頑張りますw



期間は9月23日までとさせていただきます。

※締め切りました。

投票の結果？の特別企画『アキのエヴァちゃんデート計画！』  
に決定いたしました。

じゅっかいめ とくべつきかく!でもうまくいかなかった(前書き)

病気もほとんど治りましたので投稿。

Th i r d p e r s o n使おうとしたけど下手すぎてすぐ一人称にもどっちゃいますよ

過去最高の g d g d 感あんど文字数

じゅっかいめ とくべつきかく!でもうまくいかなかった

特別企画【アキのエヴァちゃんデート作戦!】

「という訳で遊園地にいかないか?」

「どういうわけだコラ」

遊園地にエヴァちゃんを誘ってみたアキ・スプリングフィールドです。

どうして遊園地か?という疑問に答えるなら似合うから。

いくらエヴァちゃんが600年を生きる大魔法使いだとしても容姿は控えめに言って幼女。

俺は当然そんなくらの姿にもどるとして、そら、お似合いの初々しい子供カップルじゃないか。

お揃いの金髪で手でもつないで遊園地を闊歩すればそれはもう、生暖かい視線を向けられるだろう。

「そんなわけだから遊園地へ——」

「なんで私が態々遊園地なんぞに行かねばならんのだ!」

「言葉を遮らないでよ。まあなんでって言われたら・・・大宇宙の意思だよ。それに行ったことないでしょ?遊園地」

「（大宇宙の意味？）む、むう・・・確かに行ったことはないが・・・。し、仕方ないな！そんなに頼むなら行ってやらんこともないぞ！」

ぷいっと顔を背けながら如何にも腹立たしげな声で肯定してる・・・ように聞こえるけど楽しみにしてるのが丸分かなほど興奮してるのだ窺える声色だ。それに加え横から見てもよくわかるくらい頬が真っ赤だ。

ほんとなら某人型ネズミの国に行こうと思ってたんだけど、うちの生徒によれば麻帆良の遊園地は色々すごいらしい。これは是非行かねばなるまい。麻帆良クオリティらしいもん。

「ありがと。じゃあ、明後日の日曜日でいいかい？いや、人が多いから土曜日とかでもいいんだけど。」

「そうだな、人ごみは嫌いだ。明日にしてくれ。」

「おk。じゃあ、しっかりエスコートするから楽しみにしてくれよ。」

「ふ、ふん！誰が楽しみなどに・・・」

最後まで照れ隠しをしてたけど、これで遊園地への約束は取り付けられた。どんなことがあっても約束を破るような事はしないだろ。無駄に大きなプライド的な問題で。

——AM04..00

朝日が登り始めるこの時間、エヴァは既に起きていた。

と言っても未だベットから出ずに布団にくるまっている。

エヴァの人形のような顔の目元には微かにだが、隈が出来ている。

封印されているとはいえ常人よりは高い回復力を持っているエヴァだが、一睡もして居ないとなるとさすがに隠しきれない。

本人の表情はと言えば、口元は緩みきっており、所謂ニヤケ顔である。

しかし断じてアキと共に行く遊園地を楽しみにしていたわけではない。そう、断じてない。

「ハッ！いかんいかん、もうそろそろ準備をせねば」

それからしばらくして、直ぐにキリッとした表情になるが、口元のヨダレを見るとなんともだらしない。

それに加えて現時刻はAM04..55。いくらアキが時間を指定していないとは言え早すぎである。

これで楽しみにしていないと言い張る姿は、どうにも微笑ましく見える。

一方アキは未だに起きていた。

しかしエヴァのような楽しみで眠れないなどという理由ではなく、単純にやるべきことが残っていたからである。その証拠にアキの周

りには足場がないほどに大量の書類が散らばっておりそれをせっせと片付ける相坂さよがいる。

カタカタとキーボードを叩く音だけが聞こえていたがパチツと強くキーをたたく音を最後に途切れる。

「ヒヤッハー！終了だぜえ！」

「お疲れ様です、アキさん。」

「ホント、いままで放置してたツケが回ってきたね。」

アキはいままで会社から送られてきた案件を、時間が指定されてない奴は放置していた。

まったくもって職務怠慢だが社長と言う立場のアキには誰にも文句が言えないのだ。それに加え『アキ至上主義』の派閥がほかの催促しようとしている社員を押さえ込んでいたということもあるのだが、いまは関係ないことだろう。

昨日、約束を取り付けた日の夜、会社から緊急の連絡が来て大量の仕事と、いままで貯めてきた仕事の期日を告げられたのだ。

「さて、これからデートだからあとは頼むよ。」

「エヴァさんですよね。わかりました。アスさんに頼んどきますう」

さよはいままで仕事をやりやすいように手伝っていたが、アキが外出するならもうどうでもいいようだ。

某蒼狸のように数ミリ浮いて足を動かさずアスを呼びに行った。それを見届けたアキは服選びを開始した。

「普通の服をきてっても面白くないよなあ……。俺も普段着れないような服を来てみるとするか。」

ポイツと市販の年齢詐称菓を口に含む。

アキの長身はエヴァより少し高い程度、145cmでとまった。

顔つきも幼くなり、女の子と見間違えるようなそれは可愛らしい姿になった。

「となると……。これかな♪」

アキはひとつの服を選び出した。

《PM08..00／麻帆良世界樹広場》

「遅い！遅すぎるぞ！まったく……。」

待ち合わせ場所、エヴァはご立腹だった。

木漏れ日の綺麗なベンチ、そこで不満を隠しきれないような声でつぶやいた。

余談だが家が隣同士なのに待ち合わせにしたのはエヴァのご要望だ。雰囲気を出したかったらしい。

（まったく、待たせては悪いと思って早くに出てきたというのに……。！）

ちなみに出てきた時間はPM07:00。かれこれ1時間ほど待ち続けている。

（むう・・・しょうがない、私が直接出向いてやるとするか・・・。）

「おい、エヴァちゃん！」

身を翻し一度戻ろうとすると、丁度アキが公園にむかって走ってくる姿が見えた。

不覚にも頬が緩んでしまったが、アキの服装を見るとすこし引きつった。

「いやあ、ごめんね。時間指定しなかった私が悪いとはいえ、真逆こんなに早く来るとは思わなくて・・・楽しみにしてた？」

「そんなわけあるか！・・・ってまってまってお、おおおまおまえ！なんだその格好は！」

「なについて、今の私に似合う服を選んできたんだよ？」

「わ、私！？それに、それはどう見てもゴスロリじゃないか！なんで男のお前がそんなもん持っているんだ！？」

そう、今のアキの服装は俗に言うゴスロリ服。

女のような顔つきで、少し鋭い目にもものすごくマッチしている。

エヴァも思わず赤面して追求するが――

「知ってるよ？エヴァちゃんもこの服持ってるって。お揃いになるかなあ・・・って買ってみたんだけど。あと口調は今の格好に合わ



せるべきでしょ？それとも『俺』のほうがいい？」

悪戯の成功した子供のような笑みをアキはエヴァに向ける。  
いつもと違いニヤニヤしてない無邪気な笑みにエヴァは顔をカアつと紅潮させる。

それはもう耳まで真っ赤になっている。

悪意やら下心やらには強いが純粋な感情をまっすぐに向けられるのは苦手なのだ。

「とりあえず行こうか。」

「……………れ」

「え？」

小さい声でエヴァが呟く。

「もどせ！口調を！」

「え、えー……。なんでまた……」

「態々行くのにそんな口調じゃ茶々丸たち出かけてるのと変わらん！せ、せっか……。せっかくのデートなのに……。」

最後は物凄い小さい声になったが、アキには聞こえたらしく満面の笑みで答える。

「はいよ。じゃさっさいこうぜ！」

「う、うむ……。」

ぎゅっと小さな手をつないで二人は駅へ向かった。

《麻帆良の技術の集大成『まほらんど』》

「なんかふざけてるよなあ。」

アキは大人向けに作られたらしい遊園地『まほらんど』のパンフレットを見ながら呟く。

「しかし技術の集大成っていうのは間違いではなさそうだぞ？ 見ろ、コーヒーカップの回転速度を」

エヴァの視線のほうに向けるとそこには高速回転してるコーヒーカップが合った。

残像が見える程早く回転しているコーヒーカップを見てアキはため息をついた。

「技術の使いどころおかしいだろ。どんだけ早く回ってるんだよ・・・。」

「ふむ、1分間に500回転だそうだ。・・・あ、乗ってる奴が飛んでった。救護班が常にいるようだな。」

「そりゃ遠心力も半端ないわ・・・。つか救護班待機させるような

遊具やめろよ。」

「しかしこれでも行列が出来るんだから、麻帆良だな。私はとても乗る気はせんぞ……。」

「……いや、乗ろう。うん並ぶぞエヴァちゃん！」

エヴァの手をとって最後尾に並ぶ。

掲げられた看板には10分待ちと書いてあった。その横にR-15マークもある。もうこども向けとは言えないだろ、と二人は思うが口には出さない。出してはいけない気がした。

「ふふふ、楽しみだな。」

「……あんなのが楽しみなのか？」

若干引き気味なエヴァが言うがアキは答えない。

アキがほんとに楽しみにしてるのはヤッパリエヴァのリアクションである。

本人に自覚はないがアキはかなりのS気質であると少なくともアスは思っている。以前そのことをエヴァには告げたが完全に忘れていた。

エヴァはもう引き返せないのだ。『麻帆良』の遊園地という行き先を肯定した時点で一般的な遊園地の楽しみも味わえない。そんなことを今更ながら思い、後悔したのだった。

しかし不意に視線を逸らすとそこには状況を打破するものが……！

「やっと視点が帰ってきたか」

「なに言ってるんだ？おまえ。」

「い、いや気にするな。」

コーヒークップに乗った。うん。すごかったよ。

初めはゆっくりなんだけど1分位するといきなり速度が上がり出した。この上なく気持ち悪くなったけどさあ。エヴァが平然としてたんだよ！リアクションを求めて態々並んだっていうのにさあ！それについて聞いてみたら・・・

「ん？何言ってるんだ？入口で麻帆良製の酔い止めが売ってただろ。」

ちくしょう・・・おーあーるぜっと

「次は何に乗るんだ？」

うーん、面白そうな遊具は・・・

？メリイゴウランド？お化け屋敷？ジェットコースター？観覧車？  
氷上パレード

観覧車は当然最後。やっぱムードは大切だよ。

メリイさんは落ち見えるから却下。やっぱ？？？の順番が妥当か。

? ジェットコースターの場合

「うお、独創的なデザインだなあ。」

やってきたジェットコースターはなぜかたこ焼きの形をしていた。ほんとになぜかわかんない。どこから来たんだたこ焼き・・・関西人がデザイン？

「二人乗りのようだな。ほら、座れ。」

エヴァがぼんぽん、と隣の席をたたく。表情もだいぶ柔らかいし、楽しんでくれているようだ。

「あいよ。」

『まもなく発射します。安全バーをおろしてください。』

機械的な声のアナウンスに従い安全バーを下ろす。

「つ、爪楊枝・・・だと!？」

「どうでもいいところに力を入れてるな、このアトラクション・・・」

安全バーが爪楊枝のデザインをしていた。これは・・・なかなかだな。

——ガタッ! カタカタカタ・・・

動き始めはかなりゆっくりだった。そこらのジェットコースターと同じだろ。しかし・・・

「た、高すぎないか？これはあがりすぎだろう・・・？」

不安そうにエヴァがつぶやく。

まあ無理もないというものだ。今、この車はそこらの高層ビルを軽く超えている。・・・かくいう俺も怖い。

——ガタタッ！

頂上に到達した。

『キャアアアアアアアアア！！！！！！』

ジェットコースターに乗っている計19名（俺とエヴァ以外）の客が一斉に悲鳴を上げる。

・・・おい、マジ泣きしてるやつが何人かいるぞ、あ、一人失神した。

俺が悲鳴をあげなかったのは・・・まあ面子ってもんがな・・・。  
ちなみにエヴァは固く目を閉じてプルプル震えている。かあい。

「な、なかなか面白かったがまだまだだな。」

なんてエヴァが言ってるが俺はコースター名物の絶叫中の写真を持ってたりする。くふふ・・・。

？お化け屋敷の場合。

「これは手抜きじゃないのか？」

ちよつと古いかな？と思える程度のまだ住めそうな屋敷があつた。

「どうだろ、さっきにアトラクションから手抜きするような遊園地には見えないんだけどなあ。」

『パンフレットをどうぞー！』

整理券とともにパンフレットを渡される。2ページしかないように見えるんだが・・・。

「まあお化け屋敷に分厚いパンフレットなんて要らないだろ。」

それもそうだ。

『恐怖の館。見取り図。』

と上に書かれている。左上に『START』とあり対して右下には『GOOL』と書かれている。

どうやらこの地図を見ながら出口を目指せ、ということらしい。端に小さく書かれたR-18マークはもう気にしない。

『食料庫』 『応接間』 『子供部屋』 『ワインセラー』 『治療室』、地下には『墓地』などもある。そのほかにもいろいろあるがまあ割愛。墓地や治療室などの怖いイメージのある場所には通らなくてもいいようになっていようだ。

「ところどころにリタイアポイントがあるってことは相当自信があるんだな……。クククツ……。エヴァ、どうする？」

「馬鹿にするな！ 恐怖の対象である吸血鬼がこんな紛い物の化け物に悲鳴など上げるものかッ！」

今回ばかりはホントに自信があるみたいだな。顔が引きつってない。

まあそんなわけでお化け屋敷内部

「よ、よし！ 次はこっちだったな！」

「いやだな、エヴァ。そっちは出口じゃないか。ほら、こっちだ。」

「そ、そうだったか？ すまないな、ははは……。はは……。。」

カリスマは犠牲となったのだ！

——ガタッ！

「ひうつ！」



ぬお！片腕にエヴァの体温を感じる！

ってかひうつ！ってWWカリスマブレイクしすぎでしょ！

まあ立体映像で現れる幽霊だし・・・しゃあないのか？

ってか技術力たけえ・・・。外の世界何年置き去りにしてるんだ？

「ほら、来いって」

考えても無駄な気がしたので俺は紳士らしくさりげなくゴールに近い道を進んだ。

・・・俺は怖くなかったのかって？・・・表情を隠すのは得意なんだ・・・。

？氷上パレードの場合

「つ、つかれた・・・」

「なんだ、情けないな！それでも男か！？」

「いや、お化け屋敷の途中で気絶したの誰だよ・・・。精神的に疲れるんだよ・・・。」

「まあ・・・すまなかったな・・・。」

会話からわかるとおりエヴァは結局気絶した。それで俺がお化け屋敷の出口まで担いでったんだけど・・・生暖かいな視線がヤヴァかった。ここまでくるものだとは思わなかった・・・。

「ここだな・・・。」

そんなこと言ってるうちに会場へ到着。

・・・普通だったので割愛（決して作者が限界を感じたわけでは  
ありません！）

遊園地デート定番！？観覧車の場合

「―――で、きょうはどうだった？」

「ああ、お前にしてはよくやったよ。」

「そうか。・・・。」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言な空間。密室に二人きりという空間は気はずかしい。  
空気がむず痒い。観覧車ってそんな空気が・・・

「なあ・・・・・・・・エヴァ。」

「・・・・・・・・なんだ？」

「また来ないか？今度はみんなと一緒に。」

「・・・・・・・・それも、悪くない。」

エヴァの声は穏やかだった。

邪な心とかなしで、つい頬が緩んでしまう。

無言のまま、時間がすぎる。

比較的大きな観覧車で、そろそろ降りる時間だろう。

そのまま俺たちは帰路についた。

そのとき不意に声かけられる。

「アキ。」

「ん？」

——ちゅ

「今日のお礼だ！勘違いするなよ！」

つんでれだなあ・・・

じゅっかいめ とくべつきかく!でもうまくいかなかった(後書き)

批判はやめて!

ラヴコメはダメだったの!  
そして正直スランプなの!

そして、100000PVたっせーい!のろのろ更新してたけど遂にやったね!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6399v/>

---

気がいたらチート転生してたから取敢えず好き勝手やるお話（仮）

2011年10月1日00時54分発行